



2008 年度 先端社会研究所

国際シンポジウム

戦争が生み出す社会 Part I

Societies Forged by War



日時

2009 年 3 月 7 日 (土)
13:00~17:00 (12:30 開場)

場所

関西学院大学大阪梅田キャンパス
K.G. ハブスクエア大阪 1405 教室



報告者：

色 音 (北京師範大学) Prof. Se Yin, Beijing Normal University
全 京秀 (ソウル大学校) Prof. Chun Kyung-Soo, Seoul National University
エヴェリーネ・ブッフハイム (オランダ戦争資料研究所) Drs. Eveline Buchheim, The Netherlands Institute for War Documentation
阿部 潔 (関西学院大学) Prof. Kiyoshi Abe, Kwasei Gakuin University

コメンテーター：

山 泰幸 (関西学院大学) Associate Prof. Yoshiyuki Yama, Kwasei Gakuin University
渡邊 勉 (関西学院大学) Prof. Tsutomu Watanabe, Kwasei Gakuin University

司会：

荻野 昌弘 (関西学院大学) Prof. Masahiro Ogino, Kwasei Gakuin University

2008 年度 先端社会研究所 国際シンポジウム

戦争が生み出す社会 Part I Societies Forges by War

日時 2009 年 3 月 7 日 (土) 13:00 ~ 17:00

場所 関西学院大学梅田キャンパス
K.G. ハブスクエア大阪 1405 教室

第一部 「戦争と植民地民族学」

シンポジウム趣旨説明

荻野昌弘

関西学院大学

それでは時間が参りましたので、只今から 2008 年度先端社会研究所国際シンポジウム「戦争が生み出す社会 Part 1」を始めたいと思います。私は今日の司会を務めます、先端社会研究所の所長の荻野と申します。よろしく申し上げます。

先端社会研究所は、関西学院大学が昨年 4 月に開設した研究所で、2008 年度の主たる共同研究として、「戦争が生み出す社会」という共同研究を行っております。「戦争が生み出す社会」ということで、歴史学者が主に関心を持つような、実際に戦時中に何が起ったのかということだけではなくて、戦争、特に私達に関心を持っているのは第二次世界大戦、アジア太平洋戦争ですけれども、その戦争がその後社会に及ぼす影響を与えたのかということについて、日本社会はもとより、日本以外の地域に関しても幅広く見て研究していこうというふうを考えております。

特にかつて戦場となった場所、あるいは軍隊が駐屯していた場所に住んでいた人々は、その後どのような形で生活を送っているのか。あるいは、特に日本の場合には、敗戦後、いわゆる外地から日本に戻って来るわけですけれども、そういった引揚げ者が戦後どのような場所でのどのような生活を送ってきたのかといったような、例えば引揚げ者の場合ですと、日本に帰って来るまでは、研究でも、あるいはドラマとか映画でもよく取り上げられるわけですけれども、それ以降その人達がどのような生活を送ったのか。例えば満州から引き揚げて来た人達が日本の戦後の文化にどのように貢献したのかといったようなことについては、あまり議論されてないわけです。それで、戦争という大きな出来事が戦後の社会にどのような影響を与えたのかといったようなことについて、我々は研究していきたい

いというふうに考えております。

とは言っても戦後だけではなくて、戦時中についても考えざるを得ないわけですが、おそらく戦争の大きな特徴というのは、他者と接触する機会を広げるという、そういう特徴を持っている。つまり、それまで畑、田圃を耕していた人が、農民が兵士として駆り出されて、いろいろな地域を兵士として転々としていく。それはその人にとっても、言ってみれば一種の異文化との出会いでもあった。

それから逆に、これは最近ようやく第一次世界大戦に関して研究されてきていることなんですけど、戦争が起ると、第二次世界大戦中の日本もそうでしたが、労働力が不足する。そうすると、例えば第一次世界大戦のフランスであれば、いろんな地域から労働者を入れるわけですね。植民地から入れますし、またそれだけではなくて、例えばポーランドのような国からもかなりの労働者を呼び寄せて、それで労働力の不足を補うわけです。日本の場合には、よく言われるのは、強制連行という形で朝鮮半島や中国からかなりの労働力を供給していたということは言われるわけですが、同時に、強制連行されて来た、或いは自発的に来た様々な人々が集まって来る場所にそもそも住んでいた人達は、どのような気持ちでその人達を迎えていたのかということについては、ほとんど語られることがない。そういう意味で、戦時期にうみ出された他者との出会いの機会が非常に増加してくるということに対して、我々は考えていかなければならないのではないのかというふうに考えております。

その意味で今日の4つの報告は全て他者との出会いというテーマと関わっているものだというふうに考えられると思います。

例えば第一部の場合ですと、特に当時「大東亜民俗学」と言われていたような植民地民俗学の問題が取り上げられるわけですが、他者に関する知が、様々な形でつくられていく。それは想像上のものもあれば、実際の接触を通じて作られていく場合もあるわけですが、戦時中に他者に関する知識がつくられていく。また、たくさんの兵士が戦地に行く中で、そこにそもそも元から住んでいた人々達との出会いもあって、場合によってはそこで愛も生まれる。愛も生まれる、その現地の人と。そして、そこで子どもが生まれるといったようなことも有り得るわけです。

そして戦時期に様々な他者との出会いが生まれた時に、どのような知識があるのか。そしてその結果、実際に、例えば新しい家族ができた場合に、その家族はどのような運命を辿るのか。それが戦後の様々な地域にどう影響を与えるのかといったようなことについて議論するのが、今日のシンポジウムの大きな目的になると思います。

先程も申し上げたように、単に日本だけではなくて国際的な広がりの中で、この戦争が生み出す社会という問題を考えていくということで、今日は3つの国から報告者をお迎え

しております。韓国とそれから中国、そしてオランダという、いずれもアジア太平洋戦争に大きく関った国なわけですけれども、その3つの国の、特にその問題について研究しておられる研究者の方をお呼びして、先端社会研究所としては初めての国際シンポジウムを開催したいというふうに、我々は企画いたしました。

それでは早速、報告者の皆さんも25分ではちょっと時間が少な過ぎるというふうに言われておりますので、第一部の「戦争と植民地民族学」に入りたいと思います。この第一部では2つの報告がされまして、その後にコメント、そして第一部に関する討論を行いたいと思います。予定では2時35分に第一部が終って15分の休憩を取りまして、その後第二部、そして最後に全体的な討論をしたいというふうに考えております。終了時刻は午後5時で、非常に長い時間ですが、どうかよろしく願いたします。



それではまず、第一報告の北京師範大学の色音先生に「満州国民民族政策における植民地民俗学の役割について－大東亜戦争で活躍した日本人学者たちの群像－」と題して報告していただきます。大東亜戦争という言葉が使われておりますが、これはなかなか日本では使われなくなっている言葉ですが、北京師範大学の先生が使われるので別に問題はないというふうに思いますが、よろしく願いたします。

第一報告：満州国民族政策における植民地民族学の役割について

—大東亜戦争で活躍した日本人学者たちの群像—

色 音

北京師範大学

北京師範大学から参りました色音と申します。これ、急いで準備したものですから、いろいろ不備があると思います。それでここに使った用語とか、できれば、戦前に使ったその当時の用語を使うという考えで使っていますが、もちろん今もいろいろ検討すべき用語がありますけれども、やはりその当時のことを紹介するから、その当時の言葉で言いましょ。例えば、満州国とかは日本で満州国と言うんですけども、中国では偽満州国と言うことになります。それはそれぞれの、多分、国で慣れている用語、また、その背景にもいろいろなイデオロギーとかの問題もありますから、日本で紹介する以上はとりあえず、その時その満州国という用語を使っていたので、その用語を使います。

それで基本的内容は「満州国民族政策における植民地民族学の役割について」というテーマですけども、主にその当時、満州国で活躍していた日本人学者、特に民族学者について紹介します。もちろん、またいろいろな人がいまして、歴史学とか、また宗教学者とかもいろいろいますけど、主に民族学者に焦点を当てて紹介します。

また基本的背景としては、1932年に満州国という植民地政権が建立されて、もちろん中国では偽満州という言葉を使いますが、とりあえず、その当時の用語として満州国という用語をそのまま使います。昔から満州国と言うか、日本ではその当時、満州とか満蒙とか言うんですけども、今の中国の東北地方ですね、その辺りはいろいろな民族が、ツングース系とモンゴル系と、もっと昔は契丹とか、いろいろな民族が暮らしていたところです。だからその当時で言っても、この満州国自体は五族協和という政策を採って、5つの民族を取り上げていますが、実際には他に小さな、人口が少ないいろいろな少数民族もいました。その中にはオロチョンとかダグルとかソロン。ソロンというのは今は使わないけど、今はエベンキという人達。ヘチェ（赫哲）というのは多分ロシアではゴルチとか使われています。それで後から満蒙と言うか、日露戦争の後も日本人も増えてきますけれども、それで満州国が建立された当時にはもういろいろな人達が住んでいたことになりますね。だからこの呼び方としてはいろいろなものがありました。満系とか何か鮮系とかね、その当時の呼び方。それは、今もう日本で出版された『満州国—「民族協和」の実像』（塚瀬進著、吉川弘文館、1998年）という本がありまして、紹介しておりますので詳しくは紹介しません。ただ一つの背景として、ちょっとだけ紹介しましょう。

だから、このような多民族から構成された、言わば一つの国民国家になっているんですね。認めても認めなくても14年間ぐらい存在した、そういう政権がありまして、それでこの政権と言うか、国家を有効に統治するために、満州国は五族協和という民族協和政策を取り上げたんですね。だから多民族国家になると、やっぱり民族関係というものが非常に大事になってくるんです。日本の場合は昔からほとんど単一民族と言うか、もちろんアイヌとかの問題もありますけれども、基本的には民族関係はそんなに複雑じゃない。多民族国家になると、やっぱり民族の関係というのは非常に微妙で、それをどういうふうに協和的に、共存的に統治・支配していくというのが昔からの課題でありました。昔の支配者もそうだった。だから満州国時代には「五族協和」というスローガンを出したんですね。(画像を映し出す)これが日本の岡田三郎助という画家が書いた『民族協和図』ですけれども、この真ん中が日本人ですね。他に満州族、モンゴル族と漢族と朝鮮族の五族の絵ですね。非常に協和的に暮らしているということを宣伝しているポスターですね。一つの政治宣伝のポスターですね。これも韓国語と言うか、ハングルで書いている五族。満州国の五色の旗の下で五族が共存・共栄しましょうという宣伝のポスターです。だからその時の、もちろん資料もいろいろたくさんあって、どっちを使えば一番良いかわからないけれども、手に入った資料を見る限り、こういう『満洲帝国概覧』(満洲帝国国務院総務庁情報処、1936年)という本の中に民族協和について非常に詳しく書いております。だから「元来満洲は民族の坩堝と言われて、昔からいろいろな民族が暮らしていた」とか、また「いろいろ不安と混乱がありました」という。だから「その故に、我が国はその建国に在っては、民族協和を強調し、建国宣言に」、このように書いているということになりますね。その時の漢字も読みにくいし、こういう様子だけを見ればいいですね。そのまま読まないですけれども。

それで、どうしてこの五族協和という民族政策、統合政策を採りましたかと言うと、その背景にもいろいろな思想的背景がありまして、その中で一番多分直接影響されたのが、



石原莞爾の最終戦争論的戦争観や、東亜連盟思想があると思います。これは日本でもよく研究されております。僕はよく、もうこの辺り時間の関係で詳しく紹介しません。

それで、石原はそういう大きな思想的背景を持っておりまして、その中で満州国支配の根源的と言うか、根源に協和党を置きたいという、一番の最初の考えとしては、協和党を建立して、つくて、この国の五族の支配をしようという考えでした。それでもこういう意識は元々孫文の、皆さんご存じの通り「五族共和」、これも「共和」ですけども文字が違うんですね。また、その五族の民族が違う。この後ろがチベットと回族が入っていて、その時の五族の中には朝鮮族と日本人は入っていないはずですね。だからこういういろいろなイデオロギー的な背景がありました。その時もいろいろなポスターをつくりました。満州国協和会というのを建立して、それがいろいろな政治的、イデオロギー的な宣伝を行った。こういうポスターをつくった。(画像を映し出す)「鳳鳥来賓」というのが、これが溥儀、満州国皇帝の溥儀の象徴として鳳鳥を使ったんですね。これで大満州国の旗、こういう五色の旗で、この下にその時の行政、省ですね。吉林省とか興安省とか、5つの省があった。それで、やっぱりいろいろな面で、「日満携手」という宣伝もいろいろな形で行われていました。そこで「民族協和」というのが非常に中核的な、中心的なスローガンとして出されたんですね。その中で満州国協和会が一番大事な役割を果たしていました。また、これは中国語でもいろいろなポスターをつくって、子ども達も非常に仲良く共存しているという、「王道楽土」というイメージを宣伝しています。非常に良い楽土の満州国だとか。また、都市計画とかもいろいろ新京、その時満州国の首都でした新京の都市計画とか、よく宣伝されていました。

先ほど紹介したように、元々石原は協和党という党をつくるという考えでしたが、いろいろまた意見の対立があって、最終的には協和会という名前を使ったんです。それで満州国が1932年3月に建国と言うか、建立されたすぐ後に、7月にこういう協和会が発足されています。それで「五族協和」と「王道楽土」という建国のスローガンを実現するため



の手段として、こういういろいろな形を模索していました。だから当時で言えば、「五族協和」というのは満州国の立国精神と言うべき役割を果たしていました。

それでその時の資料もたくさん、膨大な資料がありまして、今のところそんなに完璧に全部集めてないわけですが、手に入った資料とかを見ると、手書きのものとか非常に簡単な印刷物とかありまして、誰がつくったものとか年代も不明なものがあります。その中に書いている満州国民族協和政策の本質は、やはり、日本民族を中心とした、指導民族とした「民族協和」であったことが明らかであろうと思います。「民族協和」をつくるんだけど、誰を中心にその協和的社会事情をつくるのかとか、それがやっぱり日本民族を中心につくるという考えでしたと思います。ただ、この絵を見ても、真ん中にちょうど日本人がいて、その周りに他の民族がいますね。だからそこでも、この絵からもわかるように、やっぱり日本民族を中心に民族協和的な政策を採りましょうということでした。それでこれを基本的背景として、満州国が「五族協和」という政策を採りましたということを紹介しました。

次に、民族学と満州国の民族協和政策との関係性がどうだったのか、少し話したいと思います。

今のところ手に入った資料から見ると、満州国における民族協和政策を制定する時に、民族学者の研究成果がどれほど参考され利用されたかについて、直接検証できる資料が非常に少ないですね。だから今日の発表では主に満州国が建立された以降の、その後の民族学に焦点を当てる。先ほども紹介したように、満州国にはいろいろな民族が暮らしていました。だからこういう事情が、民族学者としては非常に魅力的なところでしたということですね。いろいろな面白い異文化、他者の文化がありまして、民族学は皆さんご存じのように、国によって民族学という呼称を使う場合と人類学を使う場合がありまして、基本的には同じ学問だと思っています。それで人類学であれ民族学であれ、最初の研究対象はほとんど異文化とか他者の研究から始まっているんですね。だからそういう点から見ても、満州という、今の中国の東北地方は非常にいろいろな民族が昔から暮らしていて、いろいろな文化があって、民族学者としては非常に面白いところと想っているところがありました。だから非常に早く、20世紀の初め頃から、鳥居龍蔵とか、もちろん鳥居龍蔵は考古学者で民族学者でもありますけれども、考古学に中心的な関心を持って、その当時、奥さんの鳥居きみ子と一緒に家族で調査に行きますけど、奥さんの方がもっとフォークロア的、民俗学。その時、土俗学とかという用語を使っていて、『土俗学上より観たる蒙古』（大鏡閣、1927年）とか、いろいろ文章とか著作を残していますが、これがその時に使ったパスポートですね。だから、満州国ができる前から鳥居龍蔵とかいろいろな学者がもうすでに入っているということで、それで満州国が建国した後に植民地宗主国、日本の国民と

しての日本人学者が現地へ、現地と言うのはやっぱり満蒙とか、その時呼ばれた地方ですけども、今の中国の東北地方へ入りやすくなった、便利になった。だから、ここに来る日本人民族学者の数もかなり増えてきた。例えば赤松智城、秋葉隆とか、あと大山彦一とか泉靖一、大間知篤三など、数多くの学者がこの辺りでいろいろな調査活動を行っていました。また、この赤松、秋葉のこの本は今も手に入りやすいけど、この中でいろいろ書いていますね。元々は非常に難しいものでした。非常に魅力あるところでしたが調査しにくいとかいろいろあって、いろいろ困難があったために、「見るべき成果が少ない」とか書いていますね。それでまた昭和7年になると、京城帝国大学の創立十周年記念式に当たり、何か書いていますね。このきっかけに調査を進める可能性が増えたということを述べています。それでこの辺りの民族学者、考古学者の人数が増えることに伴って、学会をつくるが必要になってきたと言うか、そういう背景で学術団体としての満洲民族学会が形成された。それでこの後もいろいろ民族学会の学報とか雑誌もつくります。こういう学報も創刊されています。最初の会長は神尾弼春、何と読むかわからないけど、この人が会長になっていました。まさにこの時はもう大東亜戦争との用語を使っていました。

それで現代民族学というものを大事にするということになって、もう日本では岡正雄氏がこういう「現代民族学の諸問題」(『民族学研究』新1(1), 1943年)という発表をして、また、この論文も発表していますね。それが非常に満洲民族学会に影響されているんですね。

その時、この満洲民族学会で非常に中心的な役割を果たしていたのが大山彦一と大間知篤三だと思いますね。その時建国大学というのがありまして、そこで民族学と民俗学を、エスノロジーとフォークロアの授業を教えていた。その関係について、大間知篤三は述べています。例えば、「満州に於いては、民俗研究は、しかし畢竟、民族研究の一部として採り上げんとする」等々。それをまとめて言えば、満州国の場合は、いち早くフォークロアの研究からエスノロジーの民族研究に移った。満州国の場合は民族研究が第一にされていて、満州国の一つの政策としても、五族協和とかが政治的にも非常に大事にされている。だから、満州国で言えば民俗学より民族学、フォークロアよりエスノロジーの方が民族協和政策と密接な関係があったため、必要性のある学問として重視されたということですね。

それでちょっと時間の関係で飛ばしていきますけど、タイトルが「民族政策における民族学の役割」でしたので、その件をまとめて言いましょう。第1番目としては、民族協和統合政策のために基礎資料を提供したというのが一つの役割ですね。この中で述べているように、満州国家民族学を創設するとか、理論的・方法論的なアプローチをしていました。

2番目としては大学教育を通じた政策宣伝。この建国大学の中に民族学と民俗学の講義

などがありまして、そこで満州国の民族政策をよく宣伝しております。

それで3番目は国策制定への関与と委嘱研究。ある程度この学者たちの研究の成果が民族協和統合政策に役に立った。特に宗教団体法、親属継承法には非常に、大山の研究、家族制度慣習の研究とかはよく役に立ったと思います。

それで、もう時間がないので、あと4番目としてはまだ詳しくまとめてないけれども、実態調査の間接的な役割と学問的貢献。その当時の、政治のために、政府のために何か役に立ったことがあったことを話しましたが、学問的にもやっぱり価値があったということをお否定できません。今もその当時の残された資料が、貴重な資料として利用されております。だからその点については後でまたまとめて研究したいと思います。

(画像を映し出す)これが最後です。これは日満協定書をつくった、その絵ですけども、その場所が今展示場になって観光地になっております。だから戦争と戦後という繋がりの中でこれから研究すべきことも多いと思います。ご清聴ありがとうございます。

司会 (荻野) : ありがとうございます。いろいろな論点が出たと思いますけれども、また後ほど取り上げるとして、次にソウル大学校人類学科教授の全京秀先生に「帝国日本の戦争と京城帝国大学の学術調査－大陸文化研究会の活動を中心に－」というテーマでお話しいただきます。全先生、よろしく申し上げます。

第二報告：帝国日本の戦争と京城帝国大学の学術調査

—大陸文化研究会の活動を中心に—

全 京秀

ソウル大学校

ソウルから参りました全と申します。僕は文化人類学が専門なので、昔からずっと野蛮人を研究するから、機械とかマシンについては全然関係がない者なんです。だから、紙を持って25分間発表をします。

今、京城帝国大学ということについて研究するのがどういう意味があるか、それを考えたら、今も世の中あちこち戦争中ですよ。アフリカも中東アジアもあちこち戦争があるので、その中で今、大学の中にいる研究者達は何をするのか、何ができるのか。僕のアメリカの友人達から聞いたんですけども、最近アメリカの大学の中は中東アジア研究費が非常に多い。その結果があと10年後できるかもしれません。それを考えたら今、60年前、70年前のいわゆる植民地にあった朝鮮の京城帝国大学、その活動、研究活動、それをちゃんと見て、その研究者達がどういう目的でどのぐらいやったのか、それを知りたいんです。

この京城帝国大学という大学が始まったのは1924年でした。大体大正の末期なので。その時帝国大学へ入るのは、学生さん達は内地の旧制高等学校を卒業して帝国大学に入ったんです。その旧制高等学校は3年の期間があるので。この京城帝国大学は朝鮮の方が高等学校が無かったんです。だから総督府とか、その時文部省が早目に2年間の予科をつくって、それで1924年に京城帝国大学は始まったんです。だから2年後の1926年に本科、本来的内容的に大学ということが始まったのは1926年だと思います。昭和元年ですか。その後この大学をつくる時に、欧米へ留学した若い先生達が新しい理論を持って京城の方に入って、何か学問的に大きな希望があったと思います。

例えば、哲学者として安部能成さんの文書が残っているの、その安部さんの文書を見たら学問的な「希望」、これから何か大陸を迎えて学問的に何ができるか、その「希望」は今私達が持っている希望と全く同じだと思います。その中は戦争とか植民地とか侵略とか、その意味はなかったと思います。でも1931年に満州事変があって、その満州事変の後、ほとんど朝鮮総督府の基本的な政策は、大陸を侵略するための軍事的な場所になるという政策ができたんですよ、朝鮮総督府がつくったのは。その枠組みの中で京城帝国大学の先生達が満州の方をずっと研究するんですね。

さっき色音先生が紹介した満州のいろんな研究の中に出た先生達の名前が、半分は京城帝国大学の先生達でした。例えば赤松智城先生、秋葉隆先生、次は泉靖一という有名な人

なので。当時、泉靖一は21歳でした。大学3年生の時に満州の方に入って、大興安嶺の方へ入って、民族学を研究したんです。その戦争が始まった満州事変後、次々と戦争に入って、日中戦争が1937年。その間に京城帝国大学の先生は、京城帝大は城大と言うんですけども、その城大が大学総長を中心にして満蒙文化研究会という研究グループをつくって、お金は軍からも外務省からも集まって、探検隊とか調査隊とかをつくって、満州・モンゴルの方に送るんです。その報告書が今、何冊も残っています。でも戦争が激しくなった後、例えば1941年の太平洋戦争が始まった後、出版は難しくなったのです。

今、研究者として自分が困るのは、今まで集まった資料はほとんどが出版された本とか雑誌、新聞の中から取った資料なので、当時、城大がつくった古文書はほとんどが見られない状態になったんです。なぜなら、1945年8月、その日、次3日間、城大の中でたくさんさんの文書を燃やしたと。だから今は古文書は全然見られない状態なんです。これがこの京城帝大を研究することの中の一つの大きな影だと思います。将来できれば、この古文書がどこから来る希望はあるんですけども。

その安部さんが言った「希望」と戦争状況、この二つを合わせて、戦争状況の中、希望を持っていた研究者達が何をやったのか。戦争協力とか戦犯とか、批判的な言葉は簡単だと思います。政治的・イデオロギー的批判は非常に簡単なものなので、私達がこれを研究するのはその戦争状況の中で研究者達がアカデミックなことをどのくらいやったのか、彼達の熱意とか希望がどこにあったのか、それが今研究者として私達が興味を持っている部分だと思います。

この城大の研究者達の研究を詳しく分析をするため、自分はMAB Complexというフレームワークを一つつくったんです。MABのMはMilitary、AはAcademic、BはBureaucrats、ミリタリーと総督府とその真ん中にサンドイッチになったアカデミックな人々、この中から学問的な成果がどのようになったのか。これを見たら京城帝大が、大学が中心にしてやったいろんな調査が、満州からニューギニアの方までやったんですね。ニューギニアの方は



海軍の調査団の資源調査団の一部として京城組をつくって、泉靖一さんを中心にして何人かが派遣されたんですよ。それが1943年、昭和18年1月でした。9月まで。大体、満州事変から終戦の間、京城帝大が中心になった活動はこの文書の中に並んでいます。

その中味までそれを全部説明するのは今は大変なので、その中の一部、大陸文化研究会、それが最初は満蒙文化研究でした。1932年の満州事変の後すぐできたものなので。この満蒙文化研究会が日中戦争が始まった後すぐにその名前が大陸文化研究会と変わるんです。それを見たら、京城帝大の城大研究者達の研究の幅が満蒙から大陸に移るんです。満蒙は大陸よりは狭いので、満蒙から大陸の方に移してある。その内容がこの文書の3番目の内容です。1938年、1939年、その時期に入ったら国家総動員令が始まって、研究者達があちこち回って研究するのが難しくなるんです。なぜなら防諜令があるんですよ。スパイ問題がある。あちこち回ったらあなたスパイじゃないかと、その疑いがあるからちょっと難しい。だからその後は研究者達はほとんどが軍に連れられて回るんです。

もちろんその前も満州、モンゴルの方は軍とか、この文書の中で紹介したんですけども特務機関の、特にオロチョン、前の色音先生の発表の中に出てきた少数民族の一つオロチョン、そのオロチョンについて非常に民族学者達が集まって研究して、いろんな報告書をつくったんです。なぜオロチョンを研究したのか。それは黒竜川江（アムール川）の、その川を渡ったらソ連ですね、ロシアですよ。だから向こう側の情報が、関東軍の特務機関の諜報員達はアムール川の向こう側の情報が必要なんです。だからオロチョンの人々は自由に向こうへ行ったり来たりするから、彼達を使ってその役割を、彼達を一つ部隊につくって連れて行ったり来たりしたのは関東軍下の諜報員でした。

その中の1人が吉岡義人という、今、この文書の中に名前があります。昭和18年に今西錦司さんグループが、向こうの蒙疆辺り、一番北の方なので、あそこを現地調査したんですよ。その時もこの吉岡義人さんの役割があったんです。秋葉さんが1935年、博克圖という興安嶺の場所の裏側にあるオロチョン族の研究が始まったのが1935年でした。1936年に泉靖一が入って、1937年にその横に体質人類学を研究した今村豊さんのグループがあちこち回って資料を集めて、今いわゆる満蒙民族学という中の柱の一つになったと思うんですけども。

その中で秋葉さんが発表したいろんな文書を見たら、その吉岡義人という諜報員の名前があちこち出るんです。ちょっとその人に対しては申し訳ないんですけども、その時、研究者達が研究する時、その研究者達を案内した人がこの関東軍下の特務機関員、諜報員です。吉岡義人さん。だからそのフレームワーク、その枠組みの中で研究者達の動きができた。だから今、私達が満蒙民族学ということを行うものの内容の基礎は、基本的に諜報員と研究者の両方がつくったものではないかと思うのです。吉岡さん自身が書きたいろ



んな文書があるんだと思うんです。なぜなら、秋葉さんが発表した論文の一部は吉岡さんの日記をそのまま写したんです。そのまま印刷して出版したことがあります。それは秋葉さんがちゃんと書いたんです。

次を見たら、この京城帝大で法学を教えた尾高朝雄という先生がいるので、その人は1944年に東京帝国大学に移って、戦後いろんな役割を持った人なので、彼の文書を見たら「文化工作」という言葉が出るんです。その「工作」という言葉は軍の言葉じゃないですか。軍の用語ですよ。当時、研究者達の、1941年、1942年、その時期に入ったら戦争が激しくなった。その時に入ったら、研究者の研究も全部文化工作だったと。その文化工作の中も、もう一人の近藤さんという言語学を教えた城大の先生なので、近藤さんの言葉は「宣撫」、少数民族について、工作の一部としての「宣撫」がどのぐらいできるか、詳しい方式を提案するんです。これが当時、戦争状況で軍に騙された研究者達の立場だと思います。だから尾高さんの言葉で「私達が行く場所は軍の旗が行くその後ろ、私達の学問の旗を持って行きましょう」と。これはひどい言葉なんですけれども、当時の研究者達の城大の先生達の認識がそのまま表現されたと思います。でも、私達がここまで発表して喋ったら、これは研究ではないと思います。

例えばそれ以外で、これからは泉靖一さんについて少し紹介したいんですけども、彼は1936年、大学3年生の時に、自分の恩師秋葉隆さんの命令で大興安嶺に入って、その時、満州の関東軍の部隊の参謀長から阿片を貰って、今、私達も一学者として現地調査する時はお土産を持って行くんですよ、お酒とかお菓子とかね。その時、泉さんはその参謀長から生阿片を貰って、その生阿片をお土産として配るんですよ。それが21歳の時のお話なんです。その後は城大のいろんな調査隊、探検隊の中心人物になって、1943年のニュー

ギニアの研究をする時も、そこに入って、ニューギニアに入って、ニューギニアの人々の生活をちゃんと研究、今そのフィールドノートが残されています。今、京大の泉拓良さんという考古学者がいるので、泉先生はお父さんですね。その後は泉さんが1945年6月、これは終戦の直前です。城大が大陸資源科学研究所をつくって、その研究所の助教授になる。それが8月29日、終戦の後なんです。その時満州のその研究所の仕事として、北京の辺り、オールドス辺りを現地調査して、今も研究が分析しないまま、生資料が民博に残っています。それを8月22日、23日、その期間の日記を見たら、彼がちゃんと座って、外は非常に世の中が変わったじゃないですか、8月15日の後ですから。でも研究室に座って、その資料をちゃんと分析するんですよ。分析して、そのまま今、資料が民博の方に残っています。あと、泉さんは普通、今紹介されたのはアンデス研究者という紹介をされるんですけど、イメージ、その前の段階を見たらそうではないと思うんですね。

何を、泉さんとかその前の泉さんの恩師の一人の赤松智城先生、宗教学を教えた先生なので、あの先生の研究とか、あの先生は1941年に自分が京城帝大の教授の身分を辞めて徳山のお寺の住職になるんですよ。その後背景もちゃんと考えたら、悩みがあったんじゃないですか。その時、戦争状況の中、希望を持って研究した研究者達としてはいろんな悩みがあって、その悩みを少しずつ残したいと。それが今もフィールドノートとして、フィールドノートは生ノートですよ。フィールドノートが分析されないまま、人口調査表とかそれが今残されたものなので、それをこれから私達がちゃんと分析して深い研究をすることが私達の将来の義務だと思います。

じゃあ大体時間どおりなので、どうもありがとうございました。

司会： ありがとうございました。それでは次にコメントに入りたいと思いますので、登壇者のお二人の先生もこちらに出てください、コメントの後すぐに討論の方に入りたいというふうに思いますので、よろしくお願いします。

それでは、コメンテーターは関西学院大学人間福祉学部の山泰幸先生にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

第一部コメント

山 泰幸
関西学院大学

色音先生、全先生、どうもご報告ありがとうございました。

今日の発表では、特に戦時中の朝鮮半島にあった京城帝国大学と、それから満州にあった建国大学の研究者達の活動を中心にご発表されたと思います。特にお二人の専門が文化人類学や民俗学ということもありまして、広く人類学関係の研究者を中心にその活動を見ていかれたように思います。

私も関連する分野を研究していますので、登場する人物の名前は非常に馴染み深い人達が多いのですが、今日ここに参加されてお話を聞かれた方にとっては、初めて聞く名前も非常に多かったのではないかと思います。また、一般的に、ここで紹介した文化人類学と、それから人偏の方の民俗学の関係もあまり区別していない人も多いのではないかと思います。エスノロジーの方の民族学も人偏の方の民俗学も、共に「ミンゾクガク」という発音でわかりにくいということもありますが、一応区別されています。しかし、戦時中はかなり密接に関係していました。

その点が、先ず色音先生の話の方でよく表れていたと思います。大間知篤三さんは柳田国男門下の民俗学者だったんですね。人偏の方の民俗学者だったんですが、満州に行って立場を変えていくわけです。日本の場合、単一民族を前提として、もちろん単一民族ではなく、他の民族もあるとされていたわけですが、日本国内では人偏の方の民俗学でやれたんですけど、満州に行くと多民族国家になっている。その多民族国家で民俗学をやるということはどういうことなのかということから、エスノロジーの方に転換していくこととなります。この転換は非常に大きいのです。

人偏の方の民俗学の「民俗」はある種の文化概念の一種だと考えても良いんですけども、人間集団そのものである「民族」を扱う民族学に変わっていきます。この辺の話は、川村湊さんの『「大東亜民俗学」の虚実』（講談社、1996年）での指摘とも関連してきますが、それに加えて、今回特に注目されたのが大山彦一さんです。大山さんは元々社会学者なんです。社会学者で満州に行って、満州の親族とか家族の研究をする。先ほどの発表もありましたけれども、それが現地の法律にも反映していくという話がありました。大山さんに着目している研究というのはそれほどまだ多くなくて、これは色音先生がここをもっと深めていかれたら面白いなと僕は思っているんです。何が面白いかと言うと、当時、大陸に行った民俗学者にしる、エスノロジーの人にしても社会学の人にしても、一番中心的なテー



マというのは家族や親族なんですね。戦後に引き揚げてきた後、例えば大山さんだったら、満州の家族制度の研究とほとんど同じ枠組で、今度は南西諸島の家族研究をやって、南西諸島の家族制度の研究とか分厚い本を出したりするわけです。戦後に、実は多くの人類学者が家族や親族研究に入っていくというのは、戦前にその枠組が準備されているということがあると思うんですね。

これは実は日本だけではなくて、人類学の歴史で言うと、一番大きな年は1922年、つまりマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』(Malinowski, Bronislaw, *Argonauts of the Western Pacific*, New York: E.P. Dutton & Co. Inc., 1922年)と、それからラドクリフ＝ブラウンの『アンダマン島民』(Radcliff-Brown, Alfred, *The Andaman Islanders*, Cambridge: Cambridge University Press, 1922年)が出た年です。これはフィールドワークとしての人類学が始まった年として重要な年ですが、実はもう一つあって、それは1949年なんです。レヴィ＝ストロースの『親族の基本構造』(Lévi-Strauss, Claude, *Les structures élémentaires de la parenté*, Paris: P.U.F., 1949年)とアメリカのマードックの『社会構造』(Murdock, George P., *Social Structure*, New York: MacMillan, 1949年)が出た年です。これは、250の社会の資料を統計的に処理して核家族の普遍性とかを主張した、その時の資料がHRAF(Human Relations Area Files)というのがアメリカにあるわけですが、それは戦前の資料収集によって準備された資料です。結局、人間の管理の学としての人類学、それに関した社会学とかが成立してくるのがやっぱり戦時中だと思います。これは世界的な動きで、日本もやっぱりそうだったんだということを非常に強く感じるんです。

これが色音先生の話に関しての1点目のコメントなんですけど、もう一つ、全先生のお話に関連させて私を感じたことを言います。非常に興味深い枠組を出されています。軍とそれから官、その間に学(大学)、アカデミズムが入ってくるというご指摘です。サンドイッチにされることで、この軍・学・官の複合的な構造ができるという話がありましたが、これはサンドイッチにされるだけではなくて、サンドイッチにされてしまった結果として、

大学の各組織が戦争とか植民地支配という目的の下に一つにまとめられてしまうと。つまり、本来は文化系と理科系、自然科学系と文化系と分かれているものが、一つの目的を持った研究調査集団に仕立て上げられていくという点が非常に重要なポイントなんですね。例えば、ここでも紹介された満州、満蒙の学術書として、『自然と文化』というタイトルの調査報告書などが出る。実はこういった『自然と文化』みたいな大きなタイトルの学術調査報告書、総合調査報告書が出てくるというのはやっぱりこの時代の大きな特徴だと思うんですね。戦後も京大とかがそういった大きな調査をしたり、また九学連合が組織されたりして、日本国内で調査をするわけですが、あの時期にもいろんな学会が一緒にまとまるわけです。日中戦争、満州事変とかの以前に、それよりもっと以前に、いろんな分野の人が一緒になって学術調査をするというのが果たしてあったかどうかというのは僕はわかりませんが、おそらく大陸というのが眼前に開けて、初めて分野を超えた総合的な学術調査という枠組ができたんじゃないのかなという感じが非常にするんですね。

そして、僕が一番関心があるのは、それが戦後にどういうふうにもたらされたかですね。同じ枠組がどうもたらされていったのか。その結果として、例えば奄美とか沖縄とか、全国各地の所にいろんな報告書が出てきます。特に面白いのは、今日も気づいたんですけども、戦後、泉さんの流れを汲む蒲生正男さんとか、それから都立大の人達というのはやっぱり親族研究にどっと入ってきて、日本中の村を調査していく。それも親族・家族研究がメインになっていくんですね。戦後の日本の親族・家族研究というのは、そういった戦争という背景、イデオロギー的な側面というのは消し去って、非常に中立的な感じで研究しているように見えるのですが、その背景になっているのは戦争中の枠組じゃないかと思うのです。

こういう話を聞くと、自分達とあまり関係のない問題だというふうに思えるかもしれませんが、例えば、関西学院大学の社会学部と関係させて言うと、もう大分前ですけども、清水盛光という先生がいらっしゃいますけれども、彼は九大の社会学出身で高田保馬の弟子です。卒業後に満鉄調査部に入って、そこで当時、支那家族の研究に関する分厚い本を一杯出しています。彼はその成果を持って、戦後、京大の人文研でずっと研究して、関学の方の社会学部に赴任してくるんですね。その時の枠組はデュルケム理論だったんですけども、それなんかを見ましても、我々が関学の社会学部で家族社会学を学んだりしていますが、それは単に現在の家族について研究していると思うかもしれませんが、その流れというのは、実は戦時中の、その基礎となっているのは満鉄調査部時代の研究成果であって、その蓄積の上でいまの学問の流れもあるわけです。だから我々とも決して無関係ではないのではないのかというふうに思うわけです。簡単ですけども、以上です。

第一部討論

司会： ありがとうございます。意外にですね、例えば関学でも小さなことで言えば、戦時中には今学生会館になっている所に兵器庫があったんですね。そこで兵器が、まあどこまで収納されていたかわかりませんが、ある種軍用地として使われていたんです。これはほとんど知られていないことですから。そういう意味で、戦争とその後続く戦後の社会というのは非常に大きな関りがあると思うんですが、今いろいろコメントが出てきたので、先ほどちょっと時間が足りなくて十分に説明できなかった点もあると思いますので、もし今のコメントに対してまた何か付け加えたい点があれば、先ずその点についてお二人の報告者の方にお聞きしたいと思います。

特に、色音先生の場合は今のコメントの中で特に取り上げられたのは、大山彦一が存在が非常に興味深いということと、それから戦後の親族研究に、特に日本の人類学ですけども、戦前・戦時中の調査というのが非常に大きな影響を及ぼしたのではないかと。最後、ご報告の中で、実態調査がどれだけの学問的な価値を持っているのかということについて考えなければいけないというようなまとめのお言葉もあったので、そういったことに関して、もし特に何かありましたらお願いしたいんですけれども、いかがですか。

色： ちょっと準備の方もあまり十分にできなかったけど、でも実際にはあまりはっきりした分析はまだ行っておりません。ただ、今中国でも、例えば満鉄の資料というのは今利用し始めました。ただ、日本語ができる方が少ないからかどうか、英文から利用している方が多いんですね。元々多分日本語を読める方が少なかったからだと思いますが、今それに非常に関心を持っている人がいて、博士論文も書いている人が出てきました。それが一つの価値で、あと、さっき紹介した満州民族学会に関わった先生達の、大山彦一先生と大間知篤三先生とがその資料に関しても一部中国語に翻訳されて、今利用されております。僕自身も幾つかの論文を訳したことがありまして、それがよく引用されて、第一次資料として利用されております。だからその当時は、実際に先ほど全先生もおっしゃったように、戦時自体の学問というものの難しさもありますね。本当に学者としてはやっぱり時代を超えることは難しいということもありまして、だからその時の背景に位置付けて評価しなくちゃいけないというのが一つのポイントだと思います。ただあまりに、全先生もおっしゃったように、批判的という簡単な形では終わらないと思います。今もっと膨大な資料を残していて、それはまた中国に関心を持っている人がかなりいますけれども利用できない状態で、非常に貴重な資料も、第一次資料がかなりありますね。その当時、例えば韓国の場合

は先生がおっしゃったように、もうすでに何人かの民族学者が大体日本と同じレベルで研究をなさっております。ただ中国の場合は、その当時、非常に学問的なフィールドというのはなされていなかった時代ですね。だから今考えてみると、非常に貴重な資料を残したというのはわかってきた。それでまたその当時調査した、例えばシャーマニズムとか、僕はシャーマニズムを中心に研究していますが、今はほとんど無くなっていったんですね。だから、その当時のシャーマニズムの事情をわかるには非常に大事な資料を残しています。だからそういうところで、これからちゃんと整理していくことが必要だと思います。どうもありがとうございます。

司会： これは午後の最後の総括討論のところでも少しお聞きしたいなと思っていましたけれども、今のお話ですと、戦前・戦時中の調査に特に中国の民族学者なり、学者が関心を持ち始めたのは比較的最近のことであるというお話ですよね。実際には中華人民共和国の政府が民族政策というのをを行うわけですね。全部で56ですか、55の少数民族と漢民族で民族が56あるということを確認していくわけですよね、民族識別政策と言うんですかね。その場合に、日本の民族学者の調査というのは別に役立てられることはなかったんでしょうか。それとも、何らかの形で戦時中、或いは戦前の調査というものがある意味で影響を及ぼしたのかどうか、その辺はどうなんでしょうか。

色： その辺りのことはあまり研究されていないですね。そういう視点から、こういう繋がりがあったかどうかという視点からの研究はほとんどないです。ただ、影響される可能性というのが少ない。それは戦争が終わると、日本自体のものはほとんど否定される立場ですから、もう日本、満州国の民族政策を参照して、新しい、その継続としての民族政策をつくるということは不可能だと思います。ただ、まだはっきり研究はしていないけれども、研究してみたら何か出てくるかもしれないです。



もう一つの原因としては、中華人民共和国が建国された後に、イデオロギーとしては旧ソ連の社会主義システムですから、学問的にもほとんどソ連の社会主義系の民族学が入ってきます。だからむしろロシアと言うか、ソビエト連邦のその時の民族政策を参考にして、また、ソ連の学者を呼んで、中国で民族学を教えるというのが多かったんです。だからこの辺りの繋がりが今のところわからないです。

司会： ありがとうございます。それでは次に、第二報告の全先生の報告のコメントに関して、特に軍・学・官ということで、軍と大学とそれから役人が一緒になって一つの調査をやっていくということと同時に、それに従って大学の組織が一つにまとめられていくと。その時に、人文社会科学と自然科学の境界さえも超えた形で調査が行われていくことになるんじゃないかというコメントがあったわけですが、おそらくその拠点になったのが京城帝国大学ではないかということだと思んですが、その点について何か付け加える点があれば、よろしくお願いします。

全： はい、ありがとうございます。

このペーパーの最後に少し書いたんですけれども、泉靖一という名前が出るんです。何年か前に香原先生という、死体をちゃんと研究した先生がいるんです。朝鮮戦争途中、米軍の要求で死体研究をした東大出身の体質人類学をやった先生なんです。この先生にインタビューした時、いつも自分達が学生時代からずっと言っていたのは、京城学派ということがあるので、京都学派じゃなくて京城学派という、「その京城学派という言葉は、内容は何か」と聞いたら、随分、理科系の体質人類学をやった先生達、今村豊さんと大阪市立に行った島五郎先生と、その下に鈴木誠先生、信州大学に行った先生なんです。

その人々全部含めて、その中で一番中心人物は泉靖一さん。泉靖一さんは元々文化系です。でも、この泉さんが中心になって、文化系と理科系が一緒になったことが京城学派ということで、このペーパーはまだ書いていないんですけれども、この京城学派の影響が戦後日本の学問の中、非常に影響が多かったのは九学連という、九学連、八学連、その前の段階が六学連でした。六学連の前の段階は三学連でした。今その三学連については非常に資料は少ない。今見たのは写真1枚だけです。六学連から参加者達を見たら、中心、ほとんどが京城大学出身なんです。特に八学連の名簿をちゃんと見れば、団長は今村豊さん。その時広島大学にいて、もう1人のご担当者は長崎大学の北村精一さん。あの先生も京城大学病院長をやった人なんです。その下で、さっき山先生のコメントの中に出てきた名前で、蒲生正男さん。蒲生正男さんは明治大学の社会学をやった先生なんです。あの蒲生さんは広島の解剖学教室の中、副手をやったんです。その副手、解剖学教室で副手をやった

ことは、蒲生さんの恩師が泉靖一ですから、泉靖一が電話を一本かけて今村さんの方に連絡して、この人を召し上げるためお願いしますという。明治大学の社会学出身が全然関係ない部分、広島大学の解剖学教室の下に副手の仕事をやる。これが京城学派の人脈だと思います。それが後の九学連までの中心的組織だと思いますね。つまり京城学派という形式的、公式的ではない組織なんですけれども、その人脈が戦後、日本のいろんな共同研究ということに、総合研究とか、その中で非常に影響があったと思います。

もう一つ、山先生からのコメントの中でちょっと面白いことがあると思うんですけれども、戦後何をできたのか、これは非常に面白いコメントです。戦前いろんなことをやって、その影響で戦後、人類学、文化人類学の中、この学問の内容がどのように変わるか。本当に変わるんですよね。このテーマについて非常に重要な中心人物はジョン・エンブリーだと思います。日本人ではなくて、アメリカのジョン・エンブリーという人が熊本の須恵村を研究して、35年から36年に家族として入って、熊本の非常に奥の村です。今も非常に交通が不便な場所です。その研究が終わった後、彼がハワイ大学の助教授になって、そのハワイ大学もホノルルではなくてマウイの方、大きい島ですよ、コナという場所。あそこのキャンパスの中で人類学を教える時、何を調査したのか。あそこは全部サトウキビ畑ばかりなので、そのサトウキビ畑を農業する日系人、その日系人のほとんどが熊本出身の日系人です。だからジャパニーズ研究が、戦前なんですけれども。その後ジョン・エンブリーさんが太平洋戦争が始まった後すぐ呼ばれて、War Relocation Campをつくる計画をやって、カルフォルニアに住んでいた日系人全部キャンプに入った、入ったんじゃなく、強制的にキャンプに入れて、それを全部管理する研究もあって、その後、戦後何をやったのか。今もコーネル大学の日本研究所の中にエンブリーさんが撮った写真が約1,500枚残っています。説明もないし、これから10年後はこれは全部ごみになりますよ。これからその写真を見たら、何枚か見せてもらったら、今の須恵村の路地の「ああ、これは誰」とか「どの辺」とか、今は風景も変わるから、これからあの写真の研究が必要なんでね。だから戦後どうなったのか。その後、エンブリーの戦後、ごめんなさい、詳しいことは本もあるし、エンブリーさんの奥さんの本もあるし、いろんなことがあるので、資料もコーネル大学に今あります。その戦前から戦後の間、学問ということが完璧に切れちゃったというのではない。何が継承されたのか、それをちゃんと詳しい情報を分析するのが我々の義務だと思います。どうも。

司会： その写真は今は一般の人が閲覧できるんですか。そのエンブリーさんの写真というのは？



全： この前北京で会議があって、横に偶然にコーネル大学の総長が座っていた。そのお話をしたら彼もびっくりして、「いつでも来てください、公開しますから」と言うんです。その情報はネットで何枚あるか、こんな資料があるよという情報はネットで公開されているんですけども、その写真1枚ずつはそのまま公開していないんです。

司会： あともう1点、特に中心的な人物として泉靖一がいるというお話だったんですけども、しかも泉靖一が残した論文というよりもフィールドノートですよね、それ自体がまだあまり分析されていないというお話だったんですけども、その辺についてももう少し詳しく。

全： 泉靖一先生の戦後発表した民族学研究の中に椰子についての論文がありますよね。あの論文は内容のほとんどが昭和18年1月から8月の間、フェールビンクというニューギニアの北方の島がある。フェールビンクという場所、フェールビンクという名前はオランダ人の名前です、昔。そこから集った資料から戦後つくった論文ですね。そしてその基になったフィールドノートは今、息子さんの泉拓良さんが持っているんです。そのフィールドノートを僕は1回見たんですけども、その当時は写真を撮るのが大変ですね。写真を撮ることができないから、全部ものとか風景とか、ニューギニアの人々は風葬、埋葬じゃなくて風葬したんですね。だからその風葬場面とかそれを全部水彩で、全部絵で描いて、絵が上手ですよ。そのノートが今そのまま残っています。だからそのフィールドノートと泉さんが海軍に報告した最終報告書が今東大文学部図書館の中に残っています。そのフィールドノートと報告書の2つを比較してみたら、泉さんのことが、泉靖一の学問について研究ができると思います。その今、海軍に出した報告書を、それだけ見たら非常に悪い人なんです。ナンバーワン、その報告書の最終結論としてね、ナンバーワン。酋長を殺して、次、酋長がもういないから、彼達に宣撫のために何をやるか、それをちゃんと書

いたんですよ。これは海軍のためにつくった報告書ですから、これはまだ出版されていないもの。海軍という横に赤字で書いた、海軍の書類のフォームがあるんですよ。それで全部タイプでやった報告書なので、だから自分が研究したことをどこに、どの目的で報告するかでその報告書の内容が別々に違うんです。だからその報告書だけ見ては、いやこれはひどいな、泉靖一は本当に悪い人だなと結論するべき。だからこれからもその資料は、今民博にある、東大に少し残されている、遺族が少し持っている、今もう最近僕がわかったのは、福岡の方のある図書館の中に1箱、泉さんの資料が残っている。なぜなら、戦後、博多の横に秘密病院があったんですよ。墮胎のため、子供を墮ろすためにつくった秘密病院があるんですよ。その秘密病院を経営した中心人物が泉靖一なんです。だから、泉靖一があそこの仕事をやったのと何か関係があって、今、福岡の図書館に泉の書類が一部残っているんじゃないかと思うんですけれども。この資料を全部集めて見るべきじゃないかと思えます。どうも。

司会： いや、いろいろ課題があるなというふうに思いましたけれども、山先生、いかがですか、今のコメントに対する意見を聞いて、お二人に。

山： 先ずは泉靖一については資料が分散されているということと、やっぱり彼が非常に若くして亡くなってしまったこと。55歳で亡くなっちゃったんですね。だから若い時から、短い間に激動の時を駆け抜けて、いろんな経験をさせていただろうと思うんですけれども、それが十分にまだ把握されていない。たとえば、国立民族学博物館が出来る直前に彼が亡くなっているわけですが、もし、彼が生きていれば、博物館のあり方も少し違っていた可能性もあるかもしれません。そういう問題もありますので、実はこれはもっと積極的に調べて、彼から見えていく。彼を視点として何か見えていく、見えてくる問題がいろいろあるのではないかと。先ほどの病院の話ですが、中国から敗戦後、中国大陸から朝鮮半島を経て多くの人が博多に引揚げてきます。その時、戦争中に暴行を受けて妊娠した母親たちが、船で帰ってくる。どう対応していいかわからない。そこで秘密の病院をつくって、対応をしていた。彼は京城の医学部とのネットワークがあったということが大きいと思えます。福岡にもやっぱり京城の医学部出身のお医者さんが何人かいてかなり親しい。そのうちの一人の娘さんは戦後有名な文化人類学者になった方もいますけれども、そういったネットワークの中でやってきたという問題があって、それも実は隠された敗戦直後の歴史を知っていく上でも重要な人物だと思います。

もう一つ、色音先生の話に戻しますと、シャーマニズム研究の問題というのが実は非常に重要です。例えば朝鮮との関係で言えば、崔南善（チェナムソン）という重要な人物が

いまして、朝鮮の歴史学者ですけれども、建国大学の教官になります。彼は「不咸文化論」という議論をするんですが、それは朝鮮民族の起源がずっと北の方にあるというもので、シャーマニズムを基盤とした文化領域というのを設定してくるんですね。これは中国文明に対して、それとは別の広大な文化領域があるというものです。朝鮮民族のアイデンティティーを学問的に、シャーマニズムを梃子にして立ち上げて議論をしていくんです。その後押しになったのが、鳥居龍蔵以来の日本のシャーマニズム研究なんですね。ただそれだけだと学説史の問題とも言えるわけですが、重要だと思うのは、解放後、そうやって学問的に価値付けされたシャーマニズム、朝鮮の場合は巫俗（ムソク）と言いますけれども、それが日本の言葉で言えば、無形民俗文化財になっていく。そして、人間国宝みたいなものも生まれてくる。つまり、現在ユネスコで文化遺産、無形遺産の整備を進めています、東アジアに関して言うと、実は戦前の日本人の学者が関連した学術調査によって価値付けされたものが、現在、文化遺産化していつているわけです。戦前と連動している問題があるんですね。今の文化遺産現象を単に観光と地域開発の問題でやるだけではなくて、一体なぜこれが価値を持ってしまったのかを考える必要がある。非常に複雑な歴史の中で生み出された、ある意味の負の遺産でありながら、同時に自分達のアイデンティティーを表すものでもあるという、非常に両義的なものが文化遺産として保存されている、そうした矛盾した問題をどう考えていくのか。これも戦争が生み出した問題として非常に重要な問題ではないか。以上です。

司会： もう一つ、先ほどの、これは山先生に対してむしろ質問なんですけど、或いは、その後で2人の他の先生にも答えてもらえると思うんですが、その戦時中に行われた調査というのが非常に学際的な調査になったということなわけですが、逆の観点からすれば、19世紀に発展していった人類学自体がむしろ非常に学際的な傾向をそもそも持っていただろうと。本来は理系の自然人類学から出発しているわけですね。だからそういう意味では、ある意味で、特に少数民族についての調査などを通じて、学際的な研究チームというものがつくりやすかった。それはそもそも人類学なり民族学の discipline (研究分野) としての性格上そういうような素地があったんじゃないかというふうにも言えると思うんですが、その辺はいかがですか。

山： これは鋭い指摘でして、イギリスの場合とかもそうですけれども、基本的には生物学者や地質学者など、自然科学系の人を中心に団体で調査するんですね。アジアの方から太平洋にかけてやる。それがオーソドックスな形なんですね。それがいわゆる個人的にフィールドワークをし始めるよりも以前のタイプの調査の形なんです。それが日本の場合

は、一歩遅れて人類学というのが入ってきているということもありますし、それを思い切り展開できるような空間と言うんですか、調査対象となるような空間がなかったという問題があって、それが遅れて出てきたと思います。むしろそういう状況で、本来欧米でやっていたタイプの調査が、人類学が中心となって他分野を媒介する役割をしてそういった総合調査の形ができてきたというふうに言えるかもしれません。

全： 例のマリノフスキーは人類学という学問の中で非常に有名な人なので、彼が実はトロブリアンド諸島で、大体最初は3年半ぐらいかな、泊まったのは。実は第一次世界大戦の途中、自分の住む場所がなくなって、なぜなら自分はイギリスから派遣されてイギリスで勉強したことに。当時彼のパスポートは敵国オーストリアの方の国籍を持っているから、彼の先生達が「あなたはこっちはちょっと危ないから、どこかに、奥に行ってください」。それでニューギニアの横にあるトロブリアンドという島に入って、それで今、私達が理解する participant observation ということが始まるんですよ。その前の段階は全部 extensive expedition です。その時からインテンシブなこと、participant observation ができたこと。それも方法論を見たら戦争の影響もあるんだと思います。でもそれが、マリノフスキーが日本の方に紹介されたのは、何人か紹介したんですけども、最初は秋葉隆先生です。なぜなら、秋葉さんが東京の東洋分校の、何と言うんですか、師匠をやる時に彼が朝鮮総督府から呼ばれて、朝鮮総督府の在外研究員の身分を持ってイギリス留学、2年間イギリス留学をするんです。その後京城帝国大学に入るんですけども、26年に京城帝大に入った後、最初にマリノフスキーについて紹介するんです。その時ちょっと誤ったことがあるので、participant observation という意味がちょっと変わって、intensive study ということに変わって、秋葉さんの言葉的には進化的研究、進化的方法と言うんですよ。それはちょっと誤解があった。それが遅れた、欧米の人類学とちょっと違う差が、時間的にも理解的にもちょっと違う差があるんだと思います。その後ずっとマリノフスキーがやった participant observation ということを実現した人は戦前は日本ではないんじゃないですか。いないんだと思います。それを考えたら、泉靖一が8カ月間ニューギニアに泊まったのは非常に意味があると思います。

司会： 15分遅れてしまいましたけれども、予定どおり休憩は15分取りまして、15時5分から第二部を開始したいと思います。では第一部の先生方、どうもありがとうございました。

2008 年度 先端社会研究所 国際シンポジウム

戦争が生み出す社会 Part I Societies Forges by War

第二部 『歴史』の現在—他者表象は変容したのか—

司会： それでは時間になりましたので、第二部を始めたいと思います。第二部は、『歴史』の現在—他者表象は変容したのか—というテーマで、第一部が主に戦前・戦時中の話だったのですが、第二部は、現在に至るまで歴史がどのように影響を及ぼしているのかという点について議論していきたいというふうに思います。

先ず最初にエヴェリーネ・ブッフハイム先生、オランダ戦争資料研究所の先生ですが、ブッフハイム先生に、特にインドネシアがオランダ領だったのですが、そのインドネシアに日本兵が行った時に、その日本兵とオランダ人の女性の間でできた家族の話などをブッフハイム先生は研究されているので、そういったことについて報告していただきたいというふうに思います。

ではよろしくお祈いします。

第三報告：変容する忠誠心、転換するアイデンティティ

Changing loyalties, shifting identities.

エヴェリーネ・ブッフハイム (Eveline Buchheim)

オランダ戦争資料研究所 (The Netherlands Institute for War Documentation)

関西学院大学先端社会研究所紀要第3号 27ページから34ページに掲載されているオランダ戦争資料研究所 エヴェリーネ・ブッフハイム氏の本報告は、ご本人の希望により、関西学院大学リポジトリ等電子媒体には転載しておりません。

司会： ありがとうございました。

それでは、4番目の報告に移りたいと思います。4番目は関西学院大学の阿部先生に、「戦後日本の『健忘症』とポスト植民地主義的な『外国人嫌悪』—民衆意識における『多民族国家日本』の抑圧—」というテーマで、やはり現在においてナショナリズムの意識というものがどのようなものであるのかということについて、ご報告していただきたいと思います。それではよろしくお願いします。

第四報告：戦後日本の健忘症（アムネシア）とポスト植民地主義的な 外国人嫌悪（ゼノフォビア）

—民衆意識における「多民族国家日本」の抑圧—

阿部 潔

関西学院大学

それでは始めたいと思います。関西学院大学の阿部です。配布したハンドアウトに従って説明をしていきたいと思いますが、タイトルに示した「戦後日本の健忘症（アムネシア）とポスト植民地主義的な外国人嫌悪（ゼノフォビア）」というものが、今の日本社会にどのように成立している、その背景に過去、今日のシンポジウムに引きつけて言うと、戦争というものがどのような社会をつくり出したのかということが、今日の話のポイントになります。

先ず最初に現状認識として、グローバル化時代において、多文化・多民族の共生ということは、これは日本においてもよく口にされる、または政府の政策としても出されております。例えば総務省が出している「多文化共生プログラム」というものもありますし、政府の刊行物でも「多文化共生」という言葉は今非常によく使われている。しかし、そこには大きく二つの暗黙の前提がありまして、一つはその担い手です。多文化共生を進めていく担い手としては、国民国家（nation-state）というものが、何の疑問もなく、何の批判も受けることなく想定されている。このことが第一点です。

第二点目として、第一点目とセットになって、共生する相手と共生している自分、そういう意味での自己と他者の民族・文化の違いに基づく自他の区分というものも、これもまた非常にはっきりしている。ですからここで言う、日本社会で言われている多文化共生というのは、新たな何か新しい文化なり民族をつくるというのではなくて、日本が多文化や多民族と共生していかなければいけない。そのことが考えられているということです。

ただ、このようにエスニシティやナショナリティというものが、ある意味で前面に出される政策なり制度が重視されるということ自体は、これは決して日本社会に特有なものとは言えません。それは言ってみれば、まさに状況としてはグローバルな規模で、いろいろなところで起っている。ですから、これはグローバル化に関する研究でよく言われるように、グローバル化の進行というものは二律背反的ではなく、同時進行的に「ナショナルなもの」を高めている。そうした状況として今の世界を描くことが、社会学では常識的な認識になっているかと思います。その上で今日のお話では、しかし同時にそのところには日本の戦後に特有なものが見て取れるのではないか。だから、傾向としてグローバル化

の中で「ナショナルなもの」が高まるということ自体は他の国とも共通しているが、その内実なりその作動の仕方において日本社会に特有なものが指摘できる。ここで敢えて「仮説」とハンドアウトには書きましたけれども、それは一体どういう仮説の下に今日の話を進めていくかと言うと、それは戦後における健忘、その健忘している対象は、今日のシンポジウムの第一セッションでも話題になった戦中の大日本帝国の在り方です。そのことを健忘、だから、もうすっかりと忘れてそのことに本人は捉われていない。そのことによって可能となっているポスト植民地主義的な外国人嫌悪・憎悪、—これはゼノフォビアという言葉で言われますが—、それが今日の日本社会における自己と他者との関係を大きく規定しているのではないか。そうした「仮説」の下に、そのことは一体どういうことなのか、それはどのようにして説明できるのかという点を、今日の私の発表の柱にしていきたいと思っています。

今日の第一セッションでのお二人の先生方からの話にもありましたように、大日本帝国というのは、これは多民族国家、多民族帝国というふうに言っても良いと思うのですが、そのことは事実としてあった。ただ、戦後という視点から見た時に非常に興味深いのは、敗戦後の日本社会において、よく「先の戦争は」という言い方を政治家はするのですが、その「先の戦争」を、たとえポーズであっても政治的・道徳的に否定する。これが一番典型的なのは、「そのことは間違っていた」、「先の戦争は誤りであった」、「一億総懺悔」といった発言で、それは一部の指導部だけの責任ではなく、一億の民がそのことに懺悔をしなければいけない。要するにそのことは「侵略は間違っていた」という認識は、—もちろんここでは非常に大雑把な話をしていますけれども—、戦後の日本社会においてある意味でのコンセンサスとなっていった。もちろん、一部の確信犯的な右翼勢力であったり、そうした認識をあからさまに否定する人々はいますが、大きな国民世論なり、教育における歴史観、さらにはメディア言説において「先の戦争は誤っていた」という認識がコンセンサスになっていった。私自身は、それは決して自虐的な歴史観であったり、占領勢力から押し付けられた歴史観では全くなく、ごくごく自然な当たり前の歴史認識だというふうに思っています。ですから、そのこと自体を否定するつもりは毛頭ございません。今日お話ししたいのは、その過程で「多民族国家日本」という歴史的な事実が、そうした認識とセットになって封印され、忘却されているのではないか。その点が、今日の話のポイントの一つになっています。

その時に注目すべき点は、実は戦後の日本社会においては「単一民族神話」、言ってみれば日本民族というのは他の民族と混じったことがない、という認識が支配的になった。これが第一点目です。それでもう一つは、日本国というのは、その民族からだけから成り立っている、との考え方。こうした「単一民族神話」が非常に力を持っていて、当たり前

に言われていますが、小熊英二氏の有名な研究からも明らかなように、戦中において「日本民族とは何か」を語る時には、むしろ「混交民族論」というものの方が優勢であった。これはもちろん、帝国が領土を拡大し、多民族というものを自らの領域に、そして制度の中に取り入れていく過程で必要となったという背景の下で、日本は「単一民族」ではなく「混交民族」なのである、そういう言説が力を持っていった。そのことが指摘できます。

私自身の関心は、そういうアカデミックな言説だけではなくて、民衆の想像力、例えば歌、当時の歌謡、軍歌であったり、民衆の間に支持された歌謡曲の中にも、実はそれが見て取れるのではないかと、という点にあります、まず最初に『興亜行進曲』の曲の一部を少し聴いていただければと思います。

(曲が流れる)

「今ぞ世紀の朝ほらけ 豊栄のぼる旭日の 四海に燦と輝けば 興亜の使命
双肩に 担ひてたり 民五億」

この曲では男と子供と女が順番に歌っている。この歌唱自体の、一男が歌い、子供が歌い、女が歌うという一、在り方自体も非常に興味深いのですが、今日はそこについては話しません。ここで注目したいところは、まさに「興亜の使命 双肩に 担ひてたり 民五億」なのです。この「五億」というものが、自分たち＝興亜の主体として人々に指示された歌の中で示されていて、当時の人々はおそらくこれを決して何か異様な数とか、何で何千万とか、朝鮮半島・台湾を含めて「一億」ではなくて「五億」なのかということには、おそらくそういう疑問の感覚を持たなかった。

もう一つ面白いのは、「桜よ 蘭よ 花牡丹」と言った時に、最近日本の歌謡では「桜」というものがある種のナショナルなイメージとして復活している動きもありますが、この歌では「桜」と同時に「蘭」や「花牡丹」、これはもちろん「牡丹」というのは中国であるし、「蘭」というのはおそらく南方をイメージとして喚起する花の名前ですが、そういう花が歌謡の中に歌われていた。これは非常に些細な一事例ですけれども、このことが一体当時何を意味していて、どうして今の我々のポピュラーなイマジナリーの中では全くそれに相応するものが無いのか。そしてまた、我々はそのことをなぜ忘れていられるのかということ、ハンドアウトの3のところで、「戦後日本における健忘症と単一民族神話」と書きましたが、これは先ほども言いましたが、単一民族神話というのは二重性を持っている。純粹なる日本の民族、そのような日本民族のみから成る国＝日本国。こうした自己認識が、戦後日本社会における単一民族神話のもとで力を持ってきた。だとすれば、今話してきた大日本帝国が多民族帝国であったこと、そして、それは為政者や軍部だけのイデオロギーに留まる

ことなく、民衆的な想像力の中でも共有されていたということを踏まえた時に、ここで大きな健忘が起っているということが指摘できるかと思います。

それで、今日の報告で共に考えていきたいのは、それが今どのようになっているのかということです。今現在の社会、戦争によって作り上げられた現在の社会の中で一体どのような意味と意義を持っているのかということを考えていく時に、これも先ほどのグローバル化論と同じで、グローバル化の下でそれまで抑圧されていたもの、冷戦構造の下で抑圧されていたものが高まっていく、それが復興したり新たにリバイブしていくということは、これも社会学や政治学の最近の議論ではよく指摘されています。その時に何が一つのポイントになるのかと言うと、何かしらの差異に基づくナショナリズムです。それは民族であったり宗教であったり言語であったりはするのですが、とにかく自他の違いに基づいて、その違いを自分たちのナショナルな運動なり意識なり感情の梃子にしている。そのような形での新たなナショナリズムというものが、ヨーロッパをはじめとして1990年代以降高まっていったということが指摘できます。

こうした動きは、それに批判的な立場からは見れば、第二次世界大戦後に様々な、もちろん国において地域において違いますが、文化的な寛容性・多様性を推進するような多文化主義政策へのある種のバックラッシュ、それへの反動や反発として理解される。当然、日本においても1990年代以降、そうした動きが見られます。例えば東京都知事を長い期間に亘って務めている石原慎太郎氏の発言というものは、治安の強化であったり、反米であったり、中国蔑視、典型的には「三国人」発言というものに明らかなように、要するに第三国人達が治安を乱しているんだ、そういう連中が日本を危うくしているんだということを言って憚らない。ただ、それは彼個人の問題だけでなく、そうした言動が多くの人々の支持を結果的にやはり得ている。そうした「三国人」発言の後も選挙で彼は当選するわけですから、ナショナリズム的な言説と外国人への嫌悪や恐怖（ゼノフォビア）というものの結び付きは日本社会においても見るすることができます。その点ではヨーロッパにおける



研究事例との共通性ということが指摘できますが、その時に一つ考えなければいけないのは、そこには多文化主義政策への反動とはおそらく異なる部分がある。と言うのは、戦後の日本社会において、それこそ「戦後責任」として、戦後に果たすべき責任として、多文化共生や多文化主義に取り組んできたという事実がなかったにも拘らず、外国人への嫌悪と差異に基づくナショナリズムとの結び付きが今見て取れる。このことを踏まえるならば—「ポスト・コロニアル・メランコリア」ということをポール・ギルロイは言っているのですけれども、それとの取敢えて対比で言うのであれば—、むしろ今の日本社会において起っているのは、戦後日本に特有な健忘に基づくような他者恐怖の表れではないだろうか。ですから、そこのところにはメランコリアというものが何かしらの陰鬱であり、陰鬱の対象が何か分からない、そういう状況としてフロイト以来、メランコリアは分析されてきたのですが、それとは違って、アムネシアというものにおいては、そういうある種の翳りや引っ掛りや躊躇いというものが無いのではないだろうか。であるからこそ、逆に排除や抑圧や差別ということは、ある意味きわめて無自覚に、しかし徹底的にできてしまうという危険性に満ちているのではないか。そうしたことが指摘できるかと思います。

その次に、では一体、先ほど紹介したような民衆歌謡の今の在り方、例えばメディア表象はどうなっているのかということの一つの切り口として、ここで考えたいと思います。非常に大雑把に言うと、メディアが表象する「在日」の人々のイメージというのが大きく変わったことが、メディア研究の領域で指摘されています。従来のように非常にネガティブなものから、よりポジティブなものへと変化した。そのこと自体は決して嘘ではないのですが、そこところにもやはり新たな問題がある。それはどういうことかと言うと、いかに肯定的に描いていたとしても、その前提には二つの文化、この場合であれば、在日の人達の文化と私達見る側のマジョリティである日本人との間には境界が設定された上で描かれている。

(ビデオ視聴)¹⁾

女性：どうしたの？

男性：聞いてほしいことがあるんだ。俺自身は大した問題じゃないと思ってるんだけど、言わないと前に進めないから。

女性：何？ 何の話？

男性：いや、普通に、普通に聞いてくれればいいから。

男性：俺は日本人じゃないんだ。

女性：どういうこと？

1) 映画『GO』（行定勲監督、2001年東映）より。

男性：言ったとおり。俺の国籍は日本じゃない。

女性：どこ？

男性：韓国。でも中学までは朝鮮だったし、半年後には日本になってるかもしれない。

女性：何言ってるの？

男性：いや、だから国籍なんか意味ないってことだよ。

女性：日本で生まれて、日本で育ったの？

男性：うん。でも教育は違う。中学までは民族学校に通って、そこで朝鮮語とかを習った。

まあ要するにバイリンガルだよ。だって、オリンピックの時なんか日本と韓国、
両方応援できるんだもん。すごいでしょ。はい、お終い。何で？ え、どうしたの？

女性：パパに小さい頃から言われてたの。韓国や中国の男の人と付き合っちゃ駄目だって。

男性：それは何か理由があるの？

女性：わかんない。パパはね、中国や韓国の人は血が汚いって言うの。

男性：(笑)

女性：何で笑うの？ ごめん。

男性：え、何で謝んの？

女性：頭ではわかるけど、駄目なの。身体が…。私の身体に杉原が入ってくるのが怖い。

阿部： この映画では、今ご覧いただいた事態が起りながらも、主人公2人がそれを愛で乗り越えて行くというお決まりのパターンのもとで、結局のところ「自分らしさ」が大事なのだ、という話になるのですが、ここで指摘したいのは、文化の違いを乗り越えて「分かりあえる」という話の、そのこと自体の是非ではなくて、逆説的に、今ご覧いただいた表象を通じて、絶対的な違いが何かわからないけれどもあることが示唆されている。だから主人公が言っていたように、頭ではわかっても身体が受け付けられないということが、もう前提になっているのです。ですが、戦前・戦中・戦後の歴史を考えていくと、そのことは無条件に前提できることでは実はない。その点については後のディスカッションで取りあげたいと思います。私の方からの非常に大雑把な問題提起としては、忘却に基づく外国人恐怖・嫌悪というものがいま現在あるのではないか。そして言うまでもありませんが、一方でその嫌悪というものは何かの時には偏愛、言ってみればフィリアになるわけです。だからフォビアとフィリアというものはおそらく相対立するものではなくて、同じことのコインの裏表のようなものになっていて、今現在の私達にとっての自己と他者、エスニシティというものを巡る自己と他者の関係を大きく規定しているのではないか。それが戦前の歴史的事実の戦後における健忘に根差しているのではないか、ということが私の方からの問題提起です。

司会： ありがとうございます。それでは続けて第二部のコメントを関西学院大学の先端社会研究所の副所長でもあります、渡邊先生にお願いします。よろしくお願いします。

第二部コメント

渡邊 勉

関西学院大学

関西学院大学の渡邊です。私は普段は階層研究とか職業経歴の研究をしています。特に統計的な分析手法を使って大量データを分析するといった、科学としての社会学を目指す立場として研究しており、今日のご発表に対してどれだけ適切なコメントができるかは自信がありませんが、出来る範囲で気になった点についてお話させていただきます。

今日のブッフハイムさんと阿部さんの報告に対して、最初に共通するお話をさせていただいて、その後、個別に少し質問をさせていただきたいと思います。出来るだけ10分以内ぐらいで終らせるよう心がけたいと思います。

まず今、阿部さんからのお話に、戦後社会の健忘の話がありましたように、第二部のテーマは、歴史の「現在」ということで、第二次世界大戦がその後の現代社会に対してどのような影響を及ぼしたのかということであったかと思います。そうした観点から、戦争の忘却や隠蔽といった問題が取り上げられ、この点がお二人の先生に共通してあったのではないかと思いました。順番は前後しますが、阿部さんの報告では、戦前戦中の日本が多民族国家であったということを、戦後われわれ日本人は健忘しているというお話でしたが、この健忘（或いは隠蔽しているのかもしれないですが）というのが意図的であったのか、それとも意図的ではないのかという辺りが気になりました。戦前戦中の事実を意図的に忘却することで、戦略的に単一民族国家として一国平和主義、あるいは平和国家を目指すといった戦後の体制を、単一民族国家という思想の下で突き進んできたというようなことなのではないかとお聞きしました。

一方ブッフハイムさんの報告では、日本人とオランダ人の子供であるということをおぼろげに忘れたというわけではないですが、隠蔽していると言うか、隠し続けて、それが80年代、90年代になって、表面化してくる。つまり「櫻」や「J.I.N」といった団体を介して父親探しがおこなわれ、アイデンティティの問題としても取り上げられるようになる。要するに、ブッフハイムさんのご報告でも、戦前戦中の出来事が戦後ずっと忘れ去られていたという事実があり、その事実は戦後社会の形成において都合がいいので、意図的に忘れようとしていたのではないかという点が、2つの報告から共通して提起されたのではないかと思います。

それならば、なぜ忘却なのか。戦後の社会は制度的にも物理的にもいろいろ大きく変容したと思います。農地改革であるとか財閥解体であるとか、新しい憲法ができるとか、様々

な形で、戦争はその後の社会に影響を及ぼしました。その中で、なぜ戦後社会は忘却という方法で戦後社会を変容、影響を及ぼしていったのかについて、お聞きしたいと思います。今日のご発表の枠組みの中で、もう少しご説明いただければと思います。

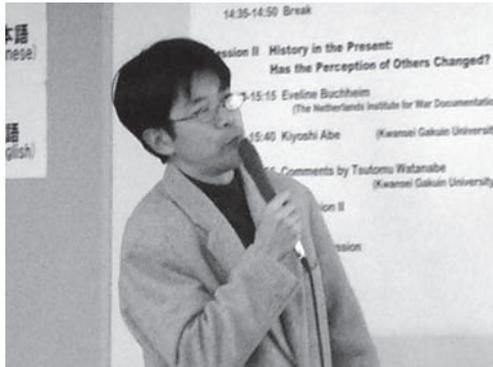
さらに、歴史の再発見（あるいは再認識）についてお尋ねしたいと思います。今日のお二人のご発表にあったように、戦後ずっと忘れられていた事実が、戦後何十年か経た後、今度は再発見するとか、健忘の話であれば強化されていくことになります。つまり影響の仕方が変わっていきます。つまり戦前戦中の状況が戦争を介することで、その後どのように伝わってきたのかと考えた時、戦後何十年間かの伝わり方とそれ以降では少し変わってきたのではないかということが、お二人の報告から言えるのではないかと思います。

具体的に、阿部さんの報告では、今日の報告ではあまり触れられませんでした。小熊英二の単一民族神話の議論であるとか、阿部さんの報告自体そうですが、近年、それまでの忘却のあり方に対して疑義が出されるようになって来ています。またプッフハイムさんの報告では、先ほどの父親探しの問題ですが、90年代になってそういうことができるようになってきた。このような変化は、社会が変わっていったからなのか、世代が変わっていったからなのか、戦争当事者たちが高齢化したからなのか。戦争がその後の社会に与える影響というものが、忘却とか発見とか、そういうタームで良いのかどうか分かりませんが、お二人の報告の枠組みの中でどう影響していくのか、影響したのかということについて、少しお考えがありましたら教えていただきたいと思います。

先ほどお話ししたように、戦争がその後の社会にどう影響を与えるのかと私たちが考えたとき、社会の仕組みや構造に影響を与えていくというのが、先ず最も大きなことだと思います。しかしそれと同時に、今日のお二人の報告にあるように、人々の意識であるとか、アイデンティティ（日本人とオランダ人の間に生まれた子供たちのアイデンティティ）であるという形で、人々にどのように影響を与えているのかという点も重要であり、今日のお話の中心はそこにあったのかと思います。その時に、人々の意識やアイデンティティに焦点が当たることによって、ますます、世代の変化、時間の経過、高齢化、といった時間的な変化の中で、戦争の影響がどう変化していったのかということが、より重要な観点になるのではないかと思います。お二人の報告者にお尋ねしたいと思っています。

影響の仕方は、もちろん直接戦争を経験したことが、その後の人生に直接影響することもあります。それが子供の世代、孫の世代というふうを受け継がれることで、その影響がある変容を遂げて、人々の意識や社会システムに影響を与えることもあり得るし、戦後すぐに影響するのではなく、何十年か後、世代が変わって初めて、戦争の影響が改めて出てくるようなこともあり得るのではないかと思います。印象を持ちました。

あとは個別的な質問を幾つかさせていただきたいと思います。まず阿部さんのご報告に



ついて、多民族国家から単一民族国家へのお話という、健忘のお話がありましたが、そこでわからなかったのは、次のようなことです。戦前戦中は多民族国家であったが、それは占領地を占領していった、どんどんと日本が侵略し、支配していったことによって作り出された国家であった。戦後、それを否定し、占領や戦争が悪かったという認識から、多民族国家自体もまた否定される、或いは健忘されるというようなお話であったように思います。しかし他方単一民族国家といっても、実は日本国内においても多様な文化があって、アイヌ民族に代表されるような少数民族もいるにもかかわらず、そういう人々もまた無視されて、単一民族国家になっていくという、要するに戦争の否定による多民族国家の否定（健忘）と、それによってアイヌ民族などの、国内の多様な民族も否定されていくまでの論理の接続がよくわかりませんでしたので、少し教えていただければと思います。

今日のお話の中では言及がなかったのですが、戦中の多民族国家を思い出す、要するに健忘から解き放たれることが、現代の多文化共生にとって一つのきっかけになるということがあるのかについて強い関心を持ちました。もちろん戦中の多民族国家と、今考えている多文化共生というのは、全く違うものだと思いますが、戦前戦中にあった多民族国家という考え方が、今の多文化共生にとって、どのような意味を持つのか、あるいはそれを可能にするような手掛りみたいなものはあるのか。とても遠いような気もしつつ、実はきっかけみたいなものも潜んでいるのではないかとも思える。今日のお話は、多民族国家であったことを健忘し単一民族国家になったことで、それが強化されて自己と他者みたいな問題、他者を排除するというか、境界をつくるというようなお話だったと思います。それが戦前戦中の多民族国家を思い出す、或いは批判的に検討することが、多文化共生を可能にする手がかりを提供しうるのかということについて少しお聞きしたいと思います。

ブッフハイムさんのご報告については、一つは、私は社会学をやっていて、特に社会階層研究であれば、マクロな社会の変化が、個人とか社会全体に対してどう影響するのかという辺りに関心が向きます。今回取り上げた日本とオランダ人の間に生まれた子供達の戦

後の生き方というものが、戦後の日本とオランダの関係、或いは日本政府とオランダ政府の置かれた位置みたいなものによってどう影響を受けてきたのか、或いは全然影響を受けてこなかったのか、ということについてお聞きしたいと思います。さらに、実際にその場となったオランダ領の東インド諸島、いわゆるインドネシアというものが、どのように介在したのかということについてもお伺いできればと思います。さらに、孫世代についてです。日本国内でもそうですが、子供の世代から孫の世代へというふうにとんどんいろいろなことが移って行って、戦争の記憶であるとか戦争の影響というのがまた違った形で現れてくるのではないかと思います。この日本人とオランダ人の間に生まれた子供達の問題、アイデンティティの問題が、孫世代にどう繋がっているのか、それがどのように受け取られていっているのかという辺りにについて、教えていただければと思います。以上です。

司会： ありがとうございます。それでは時間の節約のために、先ず第二部の討論で今のコメントのお答えをしていただきたいと思います。その後、続けて総括討論にも入りたいので、全員前の方に来ていただけますか。私は一番端の方に行きますから。

後の生き方というものが、戦後の日本とオランダの関係、或いは日本政府とオランダ政府の置かれた位置みたいなものによってどう影響を受けてきたのか、或いは全然影響を受けてこなかったのか、ということについてお聞きしたいと思います。さらに、実際にその場となったオランダ領の東インド諸島、いわゆるインドネシアというものが、どのように介在したのかということについてもお伺いできればと思います。さらに、孫世代についてです。日本国内でもそうですが、子供の世代から孫の世代へというふうにとんどんいろいろなことが移って行って、戦争の記憶であるとか戦争の影響というのがまた違った形で現れてくるのではないかと思います。この日本人とオランダ人の間に生まれた子供達の問題、アイデンティティの問題が、孫世代にどう繋がっているのか、それがどのように受け取られていっているのかという辺りにについて、教えていただければと思います。以上です。

司会： ありがとうございます。それでは時間の節約のために、先ず第二部の討論で今のコメントのお答えをしていただきたいと思います。その後、続けて総括討論にも入りたいので、全員前の方に来ていただけますか。私は一番端の方に行きますから。

第二部討論

司会： それでは、先ず第二部の報告されたお二人に先ほどいろいろな質問が出ていたの
で、それにお答えしていただきたいと思います。では先ずブッフハイム先生の方からお願
いします。

関西学院大学先端社会研究所紀要第3号 46ページから48ページに掲載されて
いるオランダ戦争資料研究所 エヴェリーネ・ブッフハイム氏の討論は、ご本人の希
望により、関西学院大学リポジトリ等電子媒体には転載しておりません。

司会： ありがとうございます。それでは続けて阿部先生の方をお願いします。

阿部： 5つぐらいのコメントがあったと思いますが、一つ一つに答えると時間も無いので、非常に大雑把ですが答えたいと思います。意図的な隠蔽であったのか、忘却であったのか—忘却というのは意図的には難しいと思うので—。それに対してはこう答えたいと思います。それが社会にとっても個人にとっても好都合であったから。何に照らして好都合であったかと言うと、渡邊さんもおっしゃったように、ある種の一国平和主義、平和国家日本として戦後復興していく上で「好都合」であった。この時に、今日は話が大きくなり過ぎるので禁欲したのですが、私の最大の関心の一つである、戦後社会におけるアメリカの存在と影というものが、そこに大きく関わってくると思います。ですから、どういう時代・社会がそれに向かわせたのかということに関しては、戦後の日本においては「世界」がかなりの程度「アメリカ」とイコールになった。そういう政治的・軍事的・経済的な関係の中で過去の戦争、その時代の多民族帝国日本を忘れることは好都合であった。そのように答えたいと思います。世代的な違いや時間的な違いというものも、このことを軸にして、戦後のアメリカの位置またその存在というのは、当然時代によって、世代によっても変わってきていますので、そここのところを今後計量的な方法等も用いて、その世代、その時代のアメリカに対する意識と、この忘却というものを比較していくことは、今後の大きなテーマとして非常に重要な点をご指摘していただいたというふうに思います。

その次に、では戦後の日本は単一民族国家と言っても、アイヌや沖縄の問題があったのではないかと、との質問について。これに対しては、以下のように私は考えています。戦前であれば、当然アイヌや沖縄もある種の差別の対象である。しかし、それは多民族全体の中では相対的に、これは括弧付きですけれども「オーセンティックな日本」に近いところ

に位置付けられていた。それが戦後においては全くの他民族、つまり異なる民族として、しかも周縁的・従属的な位置に置かれたということは明らかです。ですから、かつての戦前に比べて単一民族国家としてアイヌや沖縄の問題に取り組んだ戦後の方が、その存在の他者性が高まった。そのように考えていくことができるかと思います。

最後の質問として、では過去の多民族国家日本を思い出すことによって何が可能になるのか。言ってみれば、何のためになるのか、というポイントについて、ハンドアウトに沿いながら少し丁寧に答えたいと思います。

戦前の日本は多民族国家であった。この歴史的事実を思い出すことは、大日本帝国の下、推し進められた植民地化政策が引き起した暴力を正当化することでは断じてあり得ない。国家という政治的単位の担い手、主権者が、単一の民族である論理的必然性は実のところどこにも見当たらないこと。これが1点目です。2点目として、今後グローバル時代における多文化共生の可能性を考える上で、近代的な政治単位の雛型とされる「単一民族としての国民から成る国民国家」に縛られることのない政治的想像力と構想力が必要不可欠であること。これが第二点目です。この2点を再認識すること。いま現在のコンテキストにおいて再認識することが、ここで私が「思い出す＝リメンバーする」ことの意義として示したことです。

渡邊さんが指摘されたように、そうした関連は近いようで遠いのではないかと、とのご批判に対しては、私は今の時点ではそうした関連が意義を持つのが遠い将来なのか近い将来なのかはわからない。ただ、どうしてこういう問題提起をしたかと言うと、今日配布したハンドアウトの最初に書いてある、今言われている多文化共生の暗黙の前提を批判的に検討しないかぎりには、例え多文化共生に向かったとしても、それは根本的な共生にはならないだろう。ですから、遠いか近いかに関しては私にはわかりませんが、今日敢えて提起した問いが根本的なものかそうでないのかということに関しては、自分としてはそれが「より根本的な問い」と考えています。

司会： ありがとうございます。

総括討論

司会： 先ほどの「戦争の忘却もしくは隠蔽と戦争の発見もしくは再発見」というのは、おそらく第一部と第二部にある意味で共通するテーマでもあったわけですよね。というのは、第一部で取り上げられた大東亜民族学に関しても、これはある意味で今まで忘却されてきた、具体的に見ても、例えば泉靖一の仕事というのはどういうものであったのかというのがようやく再発見されつつある。或いは、それ以外の色音さんが挙げられた、様々な大山彦一とかそういった研究者に関しても同じ様なことが言えると。そういう意味では、戦争の忘却・隠蔽、もしくは戦争の発見と再発見というのは非常に今日の重要な、今日のシンポジウムをある意味で、全て何て言うんですかね、説明すると言うか、そういう共通のテーマではなかったかと思います。それで、予定では次に総括討論に入るわけですが、私が最初にお話ししようと思ったんですが、それは最後にして、大分長い時間が経ってフロアの皆さんも大分疲れてきて、少しは聞いているばかりではなくて話したいというような方もおられると思うので、ここでフロアの方にマイクを回して、もしご質問があれば是非お願いしたいというふうに思いますが、いかがでしょうか。どなたか、もしご質問があれば手を挙げていただけますか。はい、では。

質問者 (女性)： 他に人がいたら、先に私より先に喋った方が良いかと思うんですけど、本当に良いんですね？ では手短かに2つに絞ります。土地というものが出たかと思うので、そこをちょっと。阿部さんのをきっかけに全体への質問になるかと思うんですが、例えば阿部さんがおっしゃった石原慎太郎の場合は、私は果して、大阪が経たいいわゆる占領経験と東京のそれを単一化して良いのかと。実は皆さんいろいろ語りながら結構日本を単一化して語ったような気がして。この先端社会研究所の中で実に興味深い、戦争と場と社会というのがあるわけですよね。それで、英印軍に主として占領されていった、例えば岡山にはかなり違うインド兵との交流の記憶が残ったりもする。それに対して東京で少年時代を送った彼に、実際にアメリカ軍のトップがパイプを脚えてやって来た。そして実際に三国人と言われている人達の暴動が起っている。そのリアクションはそのまま大阪のリアクションなのだろうか。もしそうであれば、こういうシンボさえ不可能なのではないか。そういう土地の問題を聞いてみたいと思いました。

同時に、ここでは一応白人恐怖という話が出ましたが、これは例えばそういう占領恐怖も伴った勝者に対する白人へのゼノフォビア、ないしはオランダ領東インド等を取り合ったオランダ人へのゼノフォビアと、中国というもの、ないしは自分達にギルティのある、

且つ先進国であつたらうという中国・韓国と、つまり、取り上げられた在日の問題とはやはり単一の問題ではないのではないだろうかという気がするんですね。その辺りは、例えば石原さんの子供のトラウマと捉えることもできるのではないかと思います。それを中心に全体として現在の人類学や社会学もまた、今日問題化されたような単一性ないしは戦争のことを跨いで通るといふことから、全体としては自由なのだろうかという疑問をちょっと聞いてみたいと思いました。ここはもちろん違う。神戸は比較的違う。しかも神戸の地震が戦争の記憶を実は刺激したという説さえある。それは土地の問題である。しかし、一部のやはり研究所を特化して除いては、今もまだ、実は人類学も本来的な社会学や歴史学も、戦争の時代のことを避けていくのがキャンオンなのではないだろうかということです。それはもしかしたら、こちらの人の方がリアルに感じてらっしゃるのではないかという気がいたします。以上です。可能なところだけで結構です。

司会： それでは全員に答えていただく時間は多分無いと思うので、どなたかご希望の方と言うか、何か言いたいということがもしあれば、どなたからでもお願いします。いかがですか。阿部先生、名前が挙がってたんで、阿部先生は？

阿部： おっしゃることに対しては、「ごもっともです」と言う以外に言い様が無いというのが正直なところですよ。もちろん、日本を単一で語って良いのかと言えば、それはおそらく良くないだろうし、大阪と東京で違うのかと言えば、それはたしかに違う。では、関西でも岡山と大阪と神戸で同じかと言えば、違う。それは違います。ですが、今日の議論で言いたかったことは、そういう違いということに少なくとも僕の報告では照準したかったのではなくて、今の日本社会を考えていく上での一つの切り口としてゼノフォビアというものが、その中では多様な形はあるだろうけれども、「健忘に基づくゼノフォビア」があったのではないかと。そういうことを切り口として現状を見ていくことが、問題提起としては有効ではないのかという形で議論を組み立てたというふうにお答えしておきたいと思えます。

それと同じで、白人へのゼノフォビアとアジア人へのゼノフォビアというものはもちろん違う。それは違います。ですが、それに関しても、最後に少し言ったように、ある種のゼノフィリアのようなものも今の日本には当然見られるわけで、そのフィリアとフォビアが本人たちの中でも意識化されることなく共存している奇妙な状況を、概念的にどのように考えていくべきかという時に、戦前の多民族という歴史的事実がどう認識されていたのか、またどう隠蔽されてきたのか、どう忘却されてきたのかという点を考えることは、少なくとも僕自身は無駄なことではないというふうを考えています。



司会： 人類学とか或いは社会学もそうかもしれませんが、戦争ということ避けてきたのではないかという質問に関してはどなたかありますか。

金： 渡邊さんが提起したその忘却、括弧の中、隠蔽。それに対してもっとこう深く考えるべきだと思いますよ。なぜなら、忘却という心理的検証と隠蔽に関する心理的検証は非常に違うものなので。それ、括弧の中入れて、あとはもう説明しなければ、僕は今ちょっと不満があるので。例えば、泉靖一さんの著作集が出版されたものが、1972年かな、出版されたんですよ。その中、文章をちゃんと見たら、自分が1937年に出版した民族学研究の中、出版したオロチヨンの研究の報告と内容が、そのまま写したと考えるんですけども、ちゃんとこう文章を比較したら、消した部分がある。それが隠蔽。泉さんが亡くなる前、1969年に出版したフィールドワークに対して本が一冊あるので、その本もその著作集の中に入っています。自分がその後、著作集は彼が亡くなった後、委員会がつくられて、その委員会が出版したんですけども、その消した部分は、消した部分の内容が全部アヘンの問題なので。それは69年に自分がつくった本、フィールドワークの回想かな。本の中、そこもその部分が無いんですね。だから、その隠蔽という問題が非常に重要だと思います、戦争については。

もう一つのケースは鈴木栄太郎。農村社会学の先生なので。あの先生の著作集も、その著作集がつくられた時、その前の段階、40年代、30年代、つくった文章との内容が違います。言葉とか変わるんですね。消した部分もあるし言葉が変わる部分もあるし。だから、大体60年代、70年代、日本の社会は出版社会の中、たくさんの著作集が出版されたので、戦前発表した論文と、その後60年代、70年代に出版された著作集をちゃんと詳しく比較して分析しなければ、その隠蔽という段階について全部忘れる。これは非常に重要な問題だと。

だから今、戦争の問題を考える時、忘却と隠蔽が、僕が考えたのは非常に異なる問題な

ので、これに対してもはっきり区別して議論しなければならないということなのです。

司会： 渡邊先生、いかがでしょうか。今のお話。

渡邊： ご指摘ありがとうございます。もちろんおっしゃる通りだと思います。私の説明が大雑把過ぎたかと思います。戦争中の出来事や書かれたものが、戦後、表に出てこないとき、意図的ではなく出てこない場合は忘却で、意図的な場合は隠蔽なのだと思います。しかしそれは一概に判断するのは確かに難しく、慎重に検討していく必要があると思います。つまり忘却だと言っても、それは意図的に忘れたふりをしていると、或いはなかったことにしているというような、複雑な背景があり、戦前戦中のことが戦後に伝わらないこともあるのだと思います。そう考えると、先生がおっしゃるように、もっと詳細に見ていかないと本当のことはわからないし、それをごちゃ混ぜにして議論することが生産的だとは私も思いません。ご指摘いただいた点は私も賛成したいと思います。

司会： それではもう一方ぐらい質問があればお願いしたいのですが、いかがでしょうか。ありませんか。それでは最後に、もし何か全員に一言ずつ聞いていると時間も長くなってしまいますので、付け加えたい点、それから先ほどの質問に対して何か答えておきたいということがあればお願いしたいと思います。いかがですか。はい、どうぞ。

山： 補足というわけでもないんですけれども、3つほどあります。まず、戦争をテーマにする時に、第一部も第二部も、ほとんど太平洋戦争か第二次大戦の問題を扱っています。前提として、日本で戦争をテーマにする時に、太平洋戦争か第二次大戦を想起してそれをテーマにしてしまうという傾向が多分あると思うんですね。というのも、中国では解放後も、国民党と共産党の間に長い戦争がありましたし、また中華人民共和国が成立した後、朝鮮半島の方で朝鮮戦争という長い戦争がある。実は同じ「戦争」という言葉を使っても、もし戦争が生み出す社会というものを考えた時に、あなたにとって何が戦争として課題になり得るのかということ、先ず参加者と協議しながら今後決めていくということも非常に重要かなと思います。第二次大戦や太平洋戦争が無前提にテーマになってしまうこと自体が、実は戦後社会がつくっている一つの枠組みなのではないかなという点が1点目ですね。

それから、「民族」とか「国民」とか「他者」という言葉が入れ替り立ち替り出てきたわけなんですけれども、そして「他者」というのが基本的に分析概念として用いられているわけなんですけれども、たとえば「民族」概念は、いまではある種の実体性を持ったものとして

使われていますけれども、本来は歴史的に成立してきた学術用語ですね。日本では、エスノロジーの翻訳語である民族学と一緒に出てきて定着したものです。大正年間ぐらいに出てきて、戦争中に非常にリアルなものとして「民族」概念が用いられてきているということがあります。

さっきの阿部先生の映画を見ると、男性の方は「国籍」の問題として他者問題を捉えようとして、一方、女性の方は、これをおそらく「民族」の問題として捉えようとしていると思います。これは国籍を語る、国籍で他者を捉えていく流れと、民族という概念で他者を捉えていく流れとの戦いの現場でもあると思うんです。

ですので、他者を扱う時に、どの言葉を使って他者を扱っているのかを、かなり綿密に分けて分析していかないと、なぜそういう齟齬が生じるのかが見えにくいのではないかと思います。

それからもう1点ですけれども、戦争の責任の問題です。たとえば、「戦争責任」とは一体何かというふうに学生に聞くと、たいていは「戦争をした責任」というふうに答えるのですが、戦後の学者達の文章を読んでいると、どうも「負けてしまった責任を戦争責任」と考えている感じが非常に強くするんです。おそらく戦後しばらくは、「なぜ我々は負けたのか。何でこんなに頑張って負けたのか」を考えていたと思うのです。負けてしまったことの責任を感じて、例えば軍人とか大臣が自殺したりしたのだと思うのです。おそらく東京裁判が一番大きなきっかけになっていると思うんですけれども、負けた責任から戦争をしてしまったこと自体の責任へと、おそらく戦争の捉え方が変わっていくポイントがあると思うんです。その流れの中で、我々研究者の側も見ているので、その微妙な時代の変化を十分に読み取れなくなっているのではないかと思います。以上です。

司会： ありがとうございます。他にありますか。ありませんか。

それでは時間が参りましたので、最後に、結論はもちろん無いわけですが、今日の議論を総括したいと思うんですが、可能であればちょっと映像を見せたいんですが…。今からお見せしたいのは、先週、私は中国の雲南省に行きまして、雲南省の、多分見れると思うので、雲南省の少数民族は25の民族があるんですけれども、そのうちの彝族という民族の映像、まあほんの短いものですが、お見せしたいんですが。この彝族というのは、実は今日の色音先生の話にも出ていた鳥居龍蔵という民俗学者が戦前にすでに調査しています。鳥居龍蔵が調査したのは1902年から1903年にかけてです。その時に、調査している中で鳥居龍蔵が簡単なエピソードを紹介しているので、それを先ず引用したいと思うんですが。

余は、「余は」というのは鳥居龍蔵ですが、余は先ず役所に着いて、ロロ、これは今の

彝族のことですけれども、口ロ調査の件を交渉すると、応対した官吏は壮年の人であって、あまり威厳も無さそうな人物であったが、余の申し出を聞いて非常に驚き、これを阻止しようとした。元来、この付近の口ロは獐猛で、昔からしばしば支那人の市街に対して襲撃を試みた来歴があるので、もし今回の調査に際して彼らの意に逆らうようなことがあったら、またもやどんな騒ぎになるまいものでもないということですね。鳥居龍蔵が雲南省に行った時には、この彝族は非常に攻撃的、或いは好戦的な民族であるというふうに漢民族は捉えていたようです。

実際に我々が行って…。これは彼らの踊りなんですけれども、ちょうどお祭りの時であったので、こういう踊りを朝から晩まで踊り続けるということをするわけです。これはお祭りなので、豚を生け贄にして龍の神に捧げると。この神木の下に豚の頭を捧げて、その後その豚肉を皆で食べるというのを必ずやるわけです。これは豚を捌いているところで、調理して料理を出すまで全てそれを男性がやると。女性は踊り続けるということですね。

今日の話と関係すると思ったのでお見せしたんですが、今日の話聞いていて、アイデンティティーという言葉はよく使われていて、果して学術用語としてはそれが良いものなのかどうか、私は個人的にはやや疑問を持つところがあるんですけども、このアイデンティティーの問題というのが非常に重要なテーマになっていたなど。私は外国に10年間ぐらい生活していたことがあります。全部で11年ですね。11年生活したことがあるんですけども、その時に、特に外国人として生活しているわけですから、逆に日本人であるということを強く意識させられた。日本人であるということを根本的なところから自分自身疑ったことが無かったし、今も無いわけです。ところが、例えば戦時中にオランダ人と日本人でも良いですし、或いはいろいろな形でいろいろな家族ができて、子供が生まれたりしたと。その人達のアイデンティティーはおそらく私のアイデンティティーとは大分違うものになるのではないかと。それがどういうものなのかというのは私もよくわかりません。



それで、この彝族の話に戻りますと、彝族というも実は「彝族」というふうには呼ばれていますが、実際には彝族の中に民族というふうには呼べない、中国語では枝系というふうには言っていますが、branch ですね。その枝系がたくさんいて、70以上、彝族の中でもあるというふうには言われている。これが民族識別政策の中で彝族という一つの民族に統一されてしまったんですね。だから、彼らの中では自分達のことを言う時には、自分では彝族ですというふうには言わずに、例えば先ほどお見せした民族であれば、「ニス」というふうには自分達では呼ぶわけです。自分達は彝族ではなくてニスだというふうには呼ぶわけです。

ですから、この彝族の中でも実は民族のアイデンティティーという言葉が適切なのかどうかはわかりませんが、彼らの文化的なアイデンティティーを考えていくと、一体どれが、何がアイデンティティーなのかということがはっきりしなくなってしまうと。おそらく人類学者や民俗学者、或いは様々な政策によって、やはり民族というものが作り出されるという側面というのはおそらく否めないであろうと。それ以前にもう集団、文化的なまとまりがある集団というのはあるわけですが、しかし彼ら自身が、例えば今のニスであれば「自分達は彝族である」というふうには認識はしていなかったんですけども、しかしそれが政策によって彝族というふうには認識させられるようになる。それ以前の民族識別政策以前の文化的なアイデンティティーとそれ以後ではやはり変わらざるを得ないと。

そういう政策によって作り出されるアイデンティティーと、それからそうやって作り出されるアイデンティティーからさえも外れてしまう、非常に曖昧な集団、例えばブッフハイムさんが報告された集団というのがあってですね。それがおそらく戦争を契機にして、そういうその一方では政策的に民族なり文化的な集団が作り出されていく。しかし一方では、そのどこにも当てはまらないような、或いは入らないような、残余カテゴリーのような文化的アイデンティティーが同時に生まれてくるという、そういうことが起っているのではないかとこのように、私は今日の皆さん方の報告とコメントを聞いて考えました。おそらく一方で、単に政治的な、或いは政策的なレベルだけではなくて、例えば阿部さんの報告にあったように、メディアの表象によっても、そういう特定の集団なり民族に対してのカテゴリー化と言うんですか、性格付けというのはされるであろうし、しかしその一方でどこにも帰属できないような人達も常に存在し続けていくという、そういう状況があるというのが、私としては今日のシンポジウムで理解したことであります。そして、そういう2つの問題について今後も共同研究という形で研究を続けていくことができれば、非常に大きな成果が出てくるのではないかとこのように思います。

それから、おそらく我々が「戦争」と言う時にすぐに太平洋戦争を念頭に置いてしまうというのは、これはもう日本における戦争といった場合に最後の最も大きな戦争は太平洋戦争であったので、そこから考えていくと。それから、そこから少なくとも戦後の日本社

会というのがつくられてきているので、そのことについて論ずること抜きには戦後の日本社会を考えることはできない。おそらく、中国とか韓国の場合にはもしかしたら違うのかもしれない。例えば、先ほどお見せした映像にある雲南省でも日中の軍隊の間でかなり激しい戦闘があったわけですが、その後国民党と共産党の間での、これを戦争というふうには多分呼べないと思うんですが、紛争があったわけですから、それぞれの個別的な事情というのやはり考えていかなければならないし、私自身最近、第一次世界大戦の、特にフランスの第一次世界大戦で、アラブ系のアルジェリア人とかモロッコ人が非常に増加するんですが、そのことについてちょっと調べているんですが、そういったところもやはり比較をしながら見ていくということが必要ではないかというふうに思います。

それでは今日は長い間、皆さんどうもありがとうございました。これからも是非この研究を続けていきたいと思っております。最後になりますが、今日の報告者の皆さん、それからコメンテーターのお二人に拍手をお願いいたします。

シンポジウムを振り返って

Ralf Futselaar

関西学院大学先端社会研究所専任研究員

On 7 March 2009, the IASR organized the first symposium in the series "Ominous Origins: Societies Forged by War". The symposium was a considerable success, with excellent papers, as well as excellent discussions, thanks not least to the lucid commentators and audience reactions.

The first session, with presentations by professors Se Yin (Beijing Normal University) and Chun (Seoul National University) and comments by professor Yama (Kwansei Gakuin University), focused on the role of Japanese ethnology and anthropology in the Japanese empire. Their papers and the following discussion focused on the dual role the social sciences played in the imperial expansion of Japan. The efforts of ethnologists were useful to the colonial project, which in turn offered opportunities for the ethnologists. As both papers showed, however, Japanese academics also in part shaped the policies and ideology underpinning the empire. As professor Chun noted, moreover, there was considerable continuity between wartime and postwar ethnology.

The Second session, with papers by Eveline Buchheim (The Netherlands Institute for War Documentation) and Kiyoshi Abe (Kwansei Gakuin University) and comments by Tsutomu Watanabe (Kwansei Gakuin University) focused on questions of ethnicity and identity. Buchheim presented her ongoing research into the offspring of Dutch-Indonesian women and soldiers of the Japanese Imperial army in Indonesia. This presentation gave a rare but enlightening insight in the identity struggle of children, now of course adults, from relationships between members of mutually inimical groups. The mere fact that many of these, now of course elderly, children are still very actively investigating their background is testament to the particularly long shadow cast by war into private life.

After this presentation, which essentially focused on outsiders' interpretations and appropriations of a Japanese identity, professor Abe contextualized the previous papers with a lecture on the changing ethnic identity of the Japanese themselves. He argued that Japanese imperialism had made multi-cultural, multi-ethnic national self-image politically expedient. After the war, however, this was changed to a public ideology emphasizing the ethnic singularity and cultural uniqueness of the Japanese. Interestingly, the once strong notion of Japan as a multicultural empire appears to have been not only replaced, but also completely forgotten. This leads, according to Abe, not only to a historically inaccurate image, but also to an institutionally racist and xenophobic national discourse.

Taken as a whole, this symposium was enlightening in a number of respects. In keeping with the title, it revealed that the legacy of the relatively brief period of violence and conquest in the middle of the Twentieth Century remains profound. It also showed, however, that that legacy exists to an extent by choice. Choice by politicians and perhaps societies as a whole. Especially the first session, moreover, pointed at the role the social sciences themselves can play in the creation and destruction of ethnic identities. Given that the audience was made up of predominantly social scientists, this was both a sobering and an important message.

(訳)

2009年3月7日、先端社会研究所は「戦争が生み出す社会」の一連の研究に関する第1回のシンポジウムを開催した。優れた論文の発表および議論が行われた上、コメンテーターによる明確なコメントや聴衆からの反応があり、このシンポジウムは大きな成功を取めた。

第一部では色音氏（北京師範大学）と全京秀氏（ソウル大学校）の発表と、それに対する山泰幸氏（関西学院大学）のコメントがあった。ここでは大日本帝国における民族学と人類学が取り扱われた。2つの論文とそれに引き続く議論では、日本の帝国主義の膨張において社会科学が果たした二重の役割に焦点が当てられた。民族学者の努力は植民地主義のプロジェクトにとって好都合であったと同時に、彼ら自身にもチャンスを提供するものだった。この2つの論文が示したように、日本の学者たちは帝国を下支えするような政策やイデオロギーをつくりあげることに関与した。それに加え、全氏の論文が指摘した通り、戦前と戦後の民族学には相当な連続性があった。

第二部ではエヴェリーネ・ブッフハイム氏（オランダ戦争資料研究所）と阿部潔氏（関西学院大学）の発表、およびそれに対する渡邊勉氏（関西学院大学）のコメントがあった。ここではエスニシティとアイデンティティの間に焦点が当てられていた。ブッフハイム氏は彼女が現在進めている研究である、インドネシアのオランダ人女性（ユーラシアンを含む）と日本軍兵士との間に生まれた子供たちについて発表した。この発表は、相互に敵対的な集団の成員同士の関係から生じた子供たち（もちろん今は大人だが）のアイデンティティの葛藤について、滅多に触れることのない啓発的な知見を提供してくれた。現在は成人となった彼らの多くが今もなお自分たちの生い立ちについて精神的に探求しているという事実を見るだけでも、戦争が個人の人生に非常に長い影を落とすことの例証となる。

上の発表では主に日本にとっての外部者が、日本人アイデンティティをいかに解釈、流用しているかに焦点が当てられていたが、阿部氏は日本人自身の民族アイデンティティの変容に関する発表を行うことで、それまでの発表をひとつの文脈の中に捉えてみせた。彼は日本の帝国主義が多文化的で多民族的な国民の自己イメージを描くことを政治的に適切

と考えていたと論じた。しかし戦後においてこの自己イメージは、日本の民族的単一性と文化の独自性を強調する公的なイデオロギーに変容したのである。興味深いことに、かつては強く信じられていた多文化帝国日本という考えは、別のものにとって代わられたばかりか、完全に忘却された。阿部氏によれば、これは歴史的に見て不正確なイメージであるだけでなく、制度的に見て人種差別的かつ外国人嫌悪的な国民の言説を導くものである。

全体として、このシンポジウムはさまざまな点で触発されるものであった。シンポジウムの題名の通り、そこでは20世紀半ばの比較的短い期間に生じた暴力や征服の遺産が、現代においても深刻な影響を及ぼしていることが明らかにされた。またその遺産は相当程度において選択されたものとして存在していることも示された—政治家、そして恐らく社会全体による選択として。更にまた、特に第一部では、社会科学自体が民族的アイデンティティの創出や破壊に影響を与え得ることが指摘された。聴衆の大部分が社会科学に携わる人々で占められていたことを考慮すると、このことは深刻かつ重要なメッセージである。

(訳＝岩佐将志、関西学院大学先端社会研究所専任研究員)